

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第29集

東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告

— 1 —

久 保 山

1 9 8 3

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告

— 1 —

久 保 山

1 9 8 3

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

東京を起点とする東北新幹線建設計画は、上越新幹線とともに建設が着工され、昭和57年両新幹線は大宮を暫定駅として開通いたしました。

新幹線建設に伴い、文化財保護課で事前に路線内の分布調査を実施し、日本国有鉄道と協議を重ねた結果、やむなく発掘調査によって記録保存を講ずることになりました。

発掘調査は日本国有鉄道の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものであります。ここに報告書が刊行される運びとなりましたのは、日本国有鉄道の埋蔵文化財保護に対する深い御理解のたまものと感謝いたします。

また発掘調査から報告刊行に至るまで、種々の御協力をいただいた伊奈町教育委員会や地元および日本国有鉄道東京第三工事局の方々に深く感謝いたします。

ここに本書を刊行することにより、御協力を得た方々にその責を果すと共に、教育・学術研究の資料として広く活用されるよう希望いたします。

昭和58年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例 言

1. 本書は東北新幹線建設事業にかかる、北足立郡伊奈町小室に所在する久保山遺跡（東北伊奈2号）の発掘調査報告である。
2. 調査事業は埼玉県教育委員会が調整し、日本国有鉄道の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和55年4月22日から昭和56年3月31日と昭和56年4月6日から4月30日に亘って実施した。担当は酒井清治、大塚孝司である。
4. 出土品の整理及び図の作成は酒井清治、山下秀樹、大塚孝司が主にあった。
5. 発掘調査における写真は酒井、大塚が、遺物写真は酒井と山下が撮影した。
6. 本書の執筆は酒井、大塚、山下が主にあったが、分担は次のとおりである。

保護課職員 I-1

酒井 I-2、II、III、V-1・2・3・4・5の遺構、V-6-(1)、V-7-b
大形石器、VI、VII-2

大塚 V-1・2-a、V-3・4・5の土器、V-7-a、VII-1

山下 IV、V-2-b、V-6-(2)、V-7-b、VIII

なお黒曜石の分析は、国立科学博物館人類研究部 松浦秀治氏に依頼した。

7. 本書の編集は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第5課があたり、横川好富が監修した。
8. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御協力を得た。
楢崎彰一、荻野繁春、松浦秀治、鈴木忠司、山尾典子、松井政信、上住直子、大下 明（順不定）

目 次

序

例 言

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過…………… 1
2. 調査の経過…………… 3

II 遺跡の立地と環境…………… 5

III 遺跡の概観…………… 9

IV 先土器時代……………13

1. ブロック1……………13
2. ブロック外……………45

V 縄文時代の遺構と遺物……………47

1. 炉 穴……………47
2. 住居跡……………55
3. 小竪穴……………75
4. 埋 壑……………78
5. 土 坑……………82
6. ブロック2……………98
7. グリッド出土遺物…………… 122

VI 中世以降の遺構と遺物…………… 150

1. 溝…………… 150
2. 墓 塚…………… 161
3. 焼土遺構…………… 162

4. 地下式坑	164
5. 建物跡	168
6. グリッド出土遺物	168
VII 結語	172
1. 縄文時代の遺構・遺物	172
2. 陶磁器について	174
VIII 付編	176
1. 黒曜石の分析	176
IX 附表	179
1. ブロック1石器一覧表	181
2. 5号住居跡石器一覧表	187
3. ブロック2石器・礫一覧表	191

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図……………6	第34図 1・2・3号炉穴……………48
第2図 グリッド設定図……………7-8	第35図 4・5号炉穴……………49
第3図 基本土層図……………9	第36図 6・7・8号炉穴……………50
第4図 遺構分布図……………11-12	第37図 炉穴出土土器(1)……………52
第5図 ブロック1遺物分布図……………15-16	第38図 炉穴出土土器(2)……………53
第6図 遺跡周辺地形概念図……………17	第39図 炉穴出土土器(3)……………54
第7図 ブロック1出土土器(1)……………18	第40図 第1号住居跡……………55
第8図 ブロック1出土土器(2)……………19	第41図 第1号住居跡炉跡……………56
第9図 ブロック1出土土器(3)……………20	第42図 第2号住居跡……………56
第10図 ブロック1出土土器(4)……………21	第43図 第3号住居跡……………57
第11図 ブロック1出土土器(5)……………22	第44図 第4号住居跡……………58
第12図 剥片長幅関係グラフ……………23	第45図 第4号住居跡遺物分布図……………59
第13図 剥片長幅比グラフ……………23	第46図 第5号住居跡……………60
第14図 礫表を持つ剥片長幅関係グラフ……………24	第47図 第5号住居跡炉跡……………60
第15図 剥片剥離角度分布グラフ……………24	第48図 第6号住居跡……………61
第16図 砕片最大長分布グラフ……………24	第49図 第6号住居跡炉跡……………61
第17図 資料別最大長出現度数分布グラフ……………25	第50図 第1号住居跡出土土器(1)……………62
第18図 ブロック1出土土器……………25	第51図 第1号住居跡出土土器(2)……………63
第19図 接合資料No.1剥離工程図……………27-28	第52図 第3号住居跡出土土器……………65
第20図 接合資料No.2剥離工程図……………29-30	第53図 第4号住居跡出土土器(1)……………66
第21図 接合資料No.3剥離工程図……………32	第54図 第4号住居跡出土土器(2)……………67
第22図 接合資料No.4剥離工程図……………33	第55図 第5号住居跡出土土器……………67
第23図 接合資料No.5剥離工程図……………34	第56図 第6号住居跡出土土器……………68
第24図 接合資料No.6剥離工程図……………35	第57図 第6号住居跡出土土器模式図……………68
第25図 遺物分布等量線図……………37	第58図 第5号住居跡出土土器……………69
第26図 剥片分布図……………38	第59図 石材別砕片最大長出現度数分布グラフ……………70
第27図 砕片・石核分布図……………39	第60図 石器分布図……………71
第28図 接合資料No.1分布図……………40	第61図 黒曜石とチャートの分布図……………72
第29図 接合資料No.2分布図……………41	第62図 第5号住居跡炉跡出土石皿(1)……………73
第30図 接合資料No.3・4分布図……………42	第63図 第5号住居跡炉跡出土石皿(2)……………74
第31図 接合資料No.5・6・7・8分布図……………43	第64図 第6号住居跡出土土棒……………75
第32図 II種接合資料分布図……………44	第65図 第1・2号小壁穴……………76
第33図 ブロック外出土の石器……………44	第66図 第1・2号小壁穴出土土器……………77

第67図	埋壘	78	第100図	第5群土器(2)	129
第68図	埋壘出土土器	80	第101図	第5群土器(3)	130
第69図	埋壘出土土器模式図	81	第102図	第5群土器(4)	131
第70図	4号埋壘出土土器	82	第103図	第6群土器(1)	133
第71図	土坑(1)	83	第104図	第6群土器(2)	134
第72図	土坑(2)	85	第105図	第7群土器(1)	136
第73図	土坑(3)	88	第106図	第7群土器(2)	137
第74図	土坑(4)	90	第107図	第7群土器(3)	138
第75図	11号土坑出土土器	91	第108図	第8群土器	139
第76図	土坑出土土器(1)	92	第109図	グリッド出土石器(1)	141
第77図	土坑出土土器(2)	93	第110図	グリッド出土石器(2)	143
第78図	土坑出土土器(3)	95	第111図	グリッド出土石器(3)	144
第79図	土坑出土土器(4)	96	第112図	グリッド出土石器(4)	146
第80図	土坑出土土器(5)	97	第113図	グリッド出土石器(5)	148
第81図	ブロック2出土石器(1)	99	第114図	グリッド出土石器(6)	149
第82図	ブロック2出土石器(2)	100	第115図	溝(1)	151-152
第83図	石材別砕片最大長出現度数分布グラフ	101	第116図	溝(2)	154
第84図	石材別砕片最大長出現率	102	第117図	溝(3)	155-156
第85図	ブランティングチップ最大長 出現度数表	102	第118図	溝(4)	158
第86図	全石器分布図	103-104	第119図	溝(5)	159
第87図	石器分布等量線図	105	第120図	溝・グリッド出土中世遺物	160
第88図	石織・S・C・R・F・UF分布図	107-108	第121図	墓塚	161
第89図	剝片・石核分布図	109-110	第122図	墓塚出土遺物	161
第90図	黒曜石製石器分布図	111-112	第123図	焼土遺構	162
第91図	チャート製石器分布図	113-114	第124図	焼土遺構出土砥石	162
第92図	礫分布図	115-116	第125図	地下式坑(1)	163
第93図	石材別礫分布図	117-118	第126図	地下式坑(2)	164
第94図	第1群土器	123	第127図	地下式坑(3)	166
第95図	第2群土器	124	第128図	地下式坑(4)	167
第96図	第3群土器	125	第129図	建物跡	168
第97図	第4群土器(1)	126	第130図	砥石(1)	169
第98図	第4群土器(2)	127	第131図	砥石(2)	170
第99図	第5群土器(1)	128	第132図	グリッド出土遺物	171
表			第2表	第5号住居跡石材別石器組成表	69
第1表	ブロック1石器組成表	13	第3表	ブロック2石器組成表	100

図版目次

- 図版1 遺跡近景
土層断面 (26-C区)
- 図版2 ブロック1石器出土状態
ブロック1石器出土状態 (最下底面)
- 図版3 第1号、5号、6号、7号炉穴
第1号住居跡
- 図版4 第1号住居跡遺物出土状態
第1号住居跡炉跡
- 図版5 第2号住居跡
第3号住居跡
- 図版6 第4号住居跡
第5号住居跡
- 図版7 第5号住居跡炉跡
第6号住居跡
- 図版8 第1号小竪穴
第2号小竪穴
- 図版9 1号、2号、3号、5号埋裏
ブロック2遺物出土状態
- 図版10 1号~9号土坑
- 図版11 10号~17号土坑
- 図版12 18号~26号土坑
- 図版13 27号~32号土坑
- 図版14 第1号溝 (南東より)、同 (北西より)
同
- 図版15 第2号、3号溝
第4号溝
- 図版16 第5号、6号溝
第7号、8号溝
- 図版17 第9号溝
第10号、13号溝
- 図版18 第14号、16号溝
第15号溝
- 図版19 第17号、18・19号溝
- 第20・21号溝、第20号溝出土北宋銭
- 図版20 墓塚
焼土遺構
- 図版21 第1号地下式土坑
同 工具痕
- 図版22 第3号、5号地下式坑
- 図版23 ブロック1ナイフ形石器と剝片
ブロック1剝片
- 図版24 ブロック1接合資料No.1
ブロック1接合資料No.2・3
- 図版25 ブロック1接合資料No.4~8
ブロック1接合資料接合状態No.1~4
- 図版26 第1号住居跡出土土器
第4号住居跡出土土器
- 図版27 第4号住居跡出土土器
- 図版28 第6号住居跡出土土器
第1号埋裏
- 図版29 第2号、3号埋裏
- 図版30 第4号、5号埋裏
11号土坑出土遺物
- 図版31 炉穴出土土器 (表)
炉穴出土土器 (裏)
- 図版32 炉穴出土土器
第1号住居跡出土土器
- 図版33 第1号、3号住居跡
- 図版34 第4号住居跡出土遺物
第1号、2号小竪穴出土土器
- 図版35 土坑出土土器 (1)
同 (2)
- 図版36 土坑出土土器 (3)
同 (4)
- 図版37 土坑出土土器 (5)
同 (6)

- 図版38 グリッド出土第1群土器
同 第2群土器
- 図版39 グリッド出土第3・4群土器(1)
同 第4群土器(2)
- 図版40 グリッド出土第4群土器(3)
同 第5群土器(1)
- 図版41 グリッド出土第5群土器(2)
同 同 (3)
- 図版42 グリッド出土第6群土器
同 第7群土器(1)
- 図版43 グリッド出土第7群土器(2)
同 第8群土器
- 図版44 ブロック2出土土器
同上
- 図版45 第5号住居跡およびグリッド出土土器
グリッド出土土器
- 図版46 第5号住居跡炉跡出土土皿(表)
同 (裏)
- 図版47 第6号住居跡出土石棒
グリッド出土土器(1)
- 図版48 グリッド出土土器(2)
同 (3)
- 図版49 第1号溝とグリッド出土中世陶器および第20号溝出土の北宋銭
墓壇出土遺物、グリッド出土陶器
- 図版50 グリッド出土砥石
グリッド出土鉄滓

I. 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

東北新幹線のルートは、昭和46年10月15日に開催された「埼玉県行政推進対策委員会軌道交通部会」において建設当局の日本国有鉄道から、20万分の1の地図上に引かれたルートによって建設概要の説明があり若干の質疑が行われた。続いて、昭和46年10月22日及び11月18日に開催された「軌道交通部会」において、新幹線の設計協議に対する県の基本的態度について、各課の意見が聴取された。文化財保護の面では、国及び県指定文化財及び周知の遺跡については路線計画からはずすこと。また、その他の埋蔵文化財包蔵地については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。埋蔵文化財の所在と取扱いについては、特に注意が払われ、他の関連公共事業とは切りはなして協議を進めることになった。

昭和47年11月初旬、日本国有鉄道東京第三工事局長から2500分の1の計画路線図が届けられた。文化財保護課では、11月20日、21日の両日に遺跡分布調査を実施した。そして、「東北新幹線建設用地（大宮～栗橋間）内における文化財の所在および取扱いについて」昭和48年3月19日付け教文第1168号をもって県教育長から日本国有鉄道東京第三工事局長あて通知した。その内容は大意次のようなものである。

1. 建設予定地内には、県指定史跡伊奈氏屋敷跡及び埋蔵文化財包蔵地3遺跡（伊奈1号、伊奈2号、白岡1号）が所在すること。
2. 上記文化財の取扱いについては、県指定史跡については、現状変更許可申請書を提出すること。埋蔵文化財については記録保存の措置を講ずること。埋蔵文化財の記録保存にあたっては文化財保護課と十分協議すること。

これを受けて、埋蔵文化財の発掘調査について東京第三工事局と文化財保護課で協議を重ねた結果、発掘調査は文化財保護課が直接実施していく事が決定した。東京第三工事局からの委託を受けた文化財保護課では、昭和51年1月～3月に白岡1号遺跡の発掘調査をまず実施した。

また、その後の分布調査等により上尾地区で新たに遺跡（上尾1号遺跡）が発見され、伊奈地区の遺跡についても範囲等が確定した。そこで、昭和55年3月25日付け教文第1347号をもって「東北新幹線上尾、伊奈地区内における文化財の所在及び取扱いについて」日本国有鉄道東京第三工事局長あて改めて通知した。

伊奈・上尾地区における建設計画も昭和55年には進展をみせ、発掘調査についての具体的な協議が行われた。その結果、昭和55年2月から伊奈2号遺跡、上尾1号遺跡の発掘調査を実施する事が合意された。日本国有鉄道東京第三工事局から文化財保護法第57条の3に基づき発掘通知を、県教育委員会から文化財保護法第98条の2に基づき発掘調査通知を文化庁へ提出した後、発掘調査は開始された。文化庁からは、委保5の2735号を持って受理した旨通知があった。

また、昭和55年度以降の発掘調査は、増大する公共事業に対処するために設立された財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に引き継がれた。

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和55年度）

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 関根秋夫
副理事長 本郷春治
常務理事 渡辺澄夫

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 伊藤悦夫
関野栄一
福田浩人
本庄朗人

発掘 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横川好富
調査研究部第一課長 高橋一夫
酒井清治
大塚孝司

2. 発掘（昭和56年度）

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎
副理事長 沼尻和也
常務理事 渡辺澄夫

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 伊藤悦夫
関野栄一
福田浩人
本庄朗人

発掘 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横川好富
調査研究部第一課長 高橋一夫
大塚孝司
稲生美代子

3. 整理（昭和57年度）

主体者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎
副理事長 岩上進
常務理事 渡辺澄夫

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長 佐野長二
関野栄一
福田浩人
本庄朗人
江田和美

整理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長 横川好富
調査研究部副部長 小川良祐
酒井清治

4. 協力者 北足立郡伊奈町教育委員会
地元区長及び地元住民

2 調査の経過(日誌抄)

4月 調査開始とともに、遺跡北端部の本区公民館前から10区の間を調査した。本区公民館前ではすでに埋没した台地東縁部の谷が確認できた。10区付近では1～5号溝や1号埋壘が検出できた。

5月 溝の調査の継続とともに、新たに12・13区の南北に走る道までを掘り始めた。12・13区にかけては土坑が多く集中して確認された。また5号溝も確認され、それぞれの遺構を掘り始めた。

6月 遺構の実測・写真に入るとともに、8区においてローム深掘りを行なう。

7月 未買収のため発掘区を25-C区から27-B区を結ぶところから、31区の道までの間に移した。この地区も表土から人力で掘り下げたが、多量の縄文土器の散布がみられた。6～11号溝、縄文時代の1号住居跡、1号地下式坑、焼土遺構などが確認できた。手で掘り下げたため、遺構確認も含め、1ヶ月を要した。中旬には迂回道路をつくるため、12-C・13-B・Cを掘り下げた。

8月 この月に入り7月に掘り残した25・26-C区、28・29-B区の一部を掘り下げる。遺構は1号住居跡、12・13号溝の掘り下げを行なう。

9月 溝の土層図・平面図作成、住居跡の精査、実測にかかる。またこれらの写真撮影も行なう。続いて1号地下式坑・8号溝も掘り下げ、実測・写真撮影を行なう。この月に入り、黒曜石片の検出から先土器時代の探索のため、2×2m区画を2m置きに掘り下げた。その結果26-C区を中心とする地域から、黒曜石製の剝片などが出土した。この地区は細長い台地のほぼ中央で標高もこの地域で最も高い位置にある。

10月 石器分布地域の掘り下げを続けるとともに、周辺部のローム掘り下げを続けた。中旬からビニールハウスのあった25・26-C区を人力で掘り下げる。石器集中地点は写真撮影・実測を行ないながら、最も集中する26-C-14・15・19・20区を掘り下げ、ブラックバンド近くまで到達する。26-C区には13号溝に切られた大形土坑が検出され、多量の縄文式土器が出土した。後に1号小竪穴と名づけた。月末には9号・10号溝を掘り下げる。

11月 9・10号溝の実測・写真撮影。今まで手をつけられなかった川田氏宅への私道である22・23-B区表土を掘り下げる。また小島氏宅地の21区の道路より東、15区まで入る。22・23区には15・16号溝が検出され、後に地籍図との照合から、志久と小室の大字境界と推測できた。また23-B区からは2号地下坑が検出できた。15区から22区の間には住居跡・溝・土坑などが確認できた。月末に入り15号溝の実測に入る。

12月 不明確であった2・3・4号住居跡が確定できた。また近代と考えられる3～7号地下式坑の掘り下げと一部実測を行なう。20-A区から21-D区にかけて太い溝が検出され、17号溝と呼称した。この溝の南端部には、溝埋没後建物跡がつくられたようで、瓦でつぎ固めた基礎が見つかった。建物跡の調査後、17号溝を掘り下げた。22-C区には縄文時代の土坑が検出され、調査・実測を行なった。

1月 17号溝の清掃および、19-C区を中心とする19～25号土坑を掘り下げ、実測を行なう。3号住居跡は、一部残っていた精査と写真・実測作業に入る。また4号住居跡も調査に入る。3～8号地下式坑の実測・写真、24～30号土坑の掘り下げ、実測・写真、5号埋壘の精査を行なう。並行

して14-B・C・D、15-C・D区の精査を行ない、検出された20・21号溝を掘り下げる。月末より台地西縁部の発掘地区南端部、60-C区以南に重機を入れ表土剥ぎを行なう。

2月 20・21号溝、5号埋壑は今月まで作業が続き、実測を行なった。4号住居跡も土層を取り去り写真・実測を終了した。31・32号土坑の掘り下げ・実測・写真を行ないこの地区の調査が終了した。続いて2月9日より表土の剥ぎ終わった60区以南へ入る。この地区は新幹線の路線が僅かに曲るため62・63区を結ぶ、国鉄の路線杭を使用した。そのため北から39区まで続いてきたグリッド番号は、次グリッドにて方位を1°変えて53区から始まることになった。61・62区では多量のチップが出土したため慎重に下げていった。この地区の石器集中地域をブロック2として、先に掘った26-C区の先土器時代石器散布地をブロック1と呼称する。ブロック2はチャート類が多く、ローム上面であり、縄文時代の散布地と伴明した。ブロック2以外の地区に、2×2mで4m間隔にローム深掘りを行なった。

3月 ブロック2は続けて掘り下げ、実測・写真を撮影する。2号小竪穴・6号住居跡を確認して掘り下げた。6号住居跡の脇には2号炉穴が、62-B区の道路脇には墓壇が検出され、それぞれ掘り下げた。また炉穴はこの地区では1・3・4号が確認された。ブロック2の広がりを見ながら南へ追ったところ、62・63-C区に5号住居跡が確認できた。この住居跡はローム面として止めた面から下へ下げたところ、多量のチップの集中が認められ、ブロック2と同様石器散布地と推定したが、約10cm下から石囲炉が検出されたため、住居跡と認識できた。この地区でも2×2mの深掘りを行ない、先土器時代の遺物を探索したが、検出できなかった。これらの遺構の写真撮影・実測を終え、55年度の調査は終了した。

4月 未買収であった61区以北の調査を行なったが、58・59区に5～8号炉穴が近接して検出された。この遺構の調査完了とともに久保山遺跡の調査は終了した。

発掘終了後遺物は何度かの引越しのため紛失したものがある。特にブロック1・2の石器の一部に不明品が出たことは遺憾であった。

II 遺跡の立地と環境

久保山遺跡は北足立郡伊奈町字田妻5406番地ほかに所在するが、東北線蓮田駅から北西へ2.2km、高崎線上尾駅から北東へ4.3km、県道上尾-蓮田線、蓮田-鴻巣線の交差点の北側にあたる。

遺跡は大宮台地の東北端に位置する。大宮台地は南北約37km、東西約18kmで、標高10-30mの北にやや高いがほぼ平坦な、北西から南東に細長い洪積台地である。北は加須低地、西は荒川低地、東は中川低地に限られている。また鴨川・見沼・荒川・綾瀬川・元荒川によって侵蝕され、西から指扇支台・大宮主台・大和田片柳支台・鳩ヶ谷支台・岩槻支台・慈恩寺支台に分かれている。

久保山遺跡は大和田片柳支台のうちにあり、当支台は細長い落し堀りにより、東に東西約2km、南北約6kmの小室支台を形成する。小室支台はさらに小さな支谷により、東と西に二分されているが、久保山遺跡は東側の台地上に位置する。台地は東西600mと細長く、東側は綾瀬川に面し西側は細い支谷を挟んで、小室支台西側の支台が存在する。

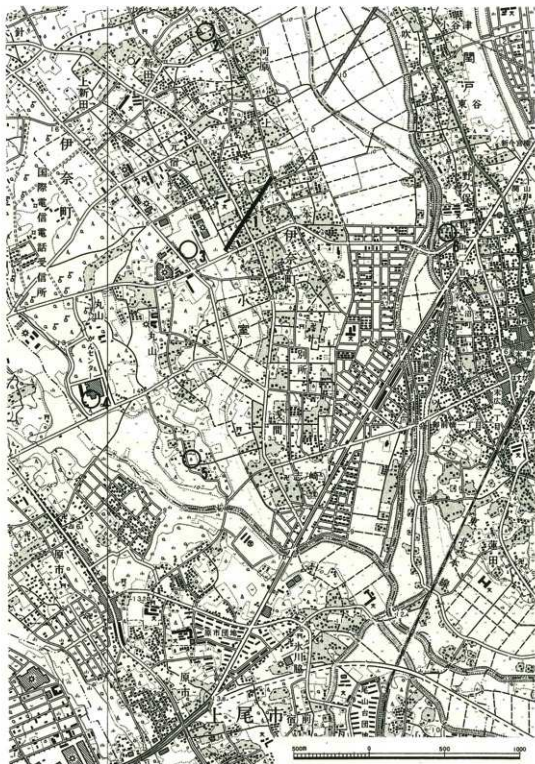
久保山遺跡をのせる台地は標高12-18mを測り、遺跡内では最高標高14.7mである。久保山遺跡側の水田面との比高差は2.5mに対して、西側は4.5mを測り急傾斜である。これは関東造盆地運動により、台地が南東方向に傾斜したため、その方向に流れる河川が台地西側を削り取ったことが原因だと考えられている。発掘調査によれば台地東側は本区公民館前の3区(第2区)から急激に落ち込む谷となることが確認された。この付近に見られるように台地東縁部は樹枝状の崩れ谷が入る複雑な地形を造る。

久保山遺跡の36-C区で国鉄の行なったボーリングでは、ローム層は地表下3.2mまで続き、それ以下は粘土、砂層、シルト層の互層で、地表下-26.15-28.6mは貝を含む砂層で、N値が上下の層で50に対してこの層では8と極端に柔らかい(30cm入れる時の打ち込み回数)。ちなみにローム層では3回である。

久保山遺跡のある小室支台では約60の遺跡がある。遺跡の大きさは径50-300mを測るが、久保山遺跡では路線の発掘の調査のため500mの長さを測る。しかし次章で触れるように連続性はなく、2遺跡の可能性がある。近接する遺跡としては小支谷を挟んで対する、縄文中期から後期の集落跡である志久遺跡(笹森ほか1976)で250mの近きにある。また同一台地西縁部の遺跡南西1.4kmには、製鉄遺跡・国分期集落で知られる大山遺跡(谷井ほか1979)がある。大山遺跡台地西縁部に沿って北西へ上ったところに、縄文時代中期と弥生時代終末期の集落跡である天神前遺跡(谷井ほか1981)がある。久保山遺跡から西方1.5kmに位置する。また北方1.1kmには県指定史跡の縄文前期小貝戸貝塚があり、西南西には新幹線のために一部調査された県指定史跡である伊奈氏屋敷跡(1981年調査)がある。当遺跡は縄文晩期の低湿地遺跡でもある。

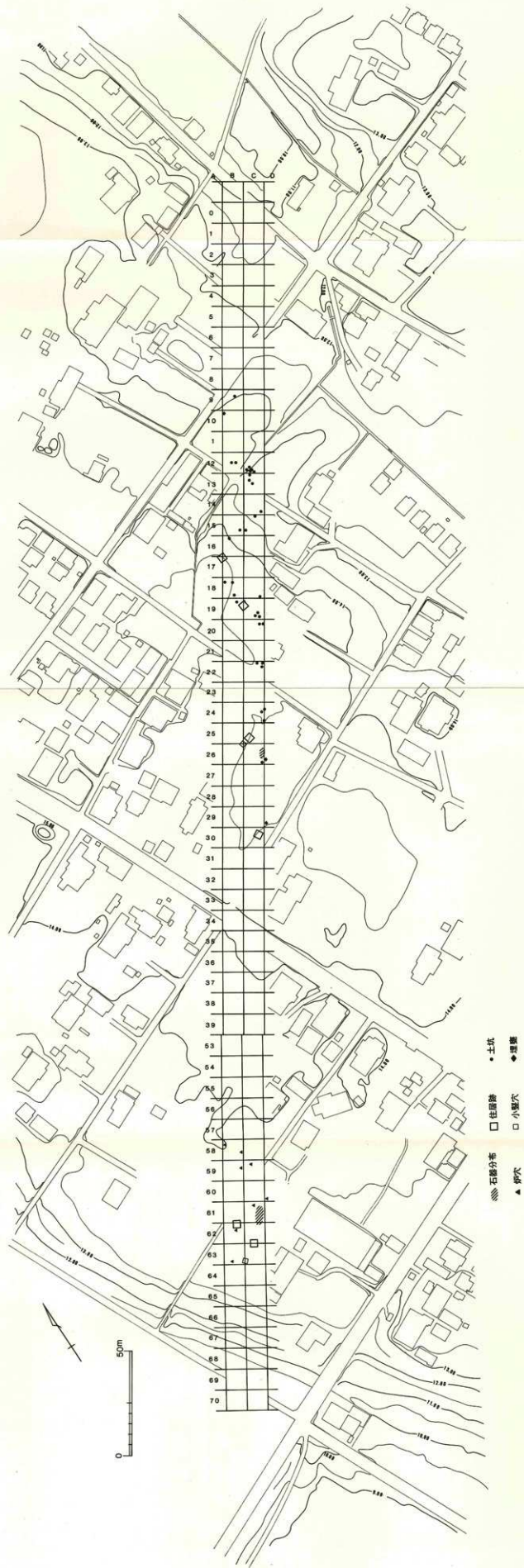
引用・参考文献

- 笹森健一ほか「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集 埼玉県遺跡調査会 1976
 谷井 彪ほか「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集 埼玉県教育委員会 1979
 谷井 彪ほか「小室天神前遺跡」伊奈町天神前遺跡調査会 1981



第1圖 遺跡位置圖

1. 久保山遺跡
2. 小貝戸貝塚
3. 志久遺跡
4. 大山遺跡
5. 伊奈氏屋敷跡
6. 関山遺跡



第2図 グリッド設定図

III 遺跡の概観

久保山遺跡は新幹線の路線幅の調査のため、細長い台地の西端から東端までを含めて呼称している。遺跡の最高位は標高14.7mを測り、北は樹枝状の扇れ谷が入り、南は急傾斜にて小支谷へ落ちている。

調査は台地を通る路線内すべてを掘ることを目標に、路線全域にグリッドを組んだ。グリッドは北から南にかけて数字で、西から東にかけてアルファベットで呼称した。基本杭は国鉄の路線中心杭が100m間隔であったので、それを利用して組んだ。路線は台地西縁に近づくとともにやや曲線を描いたため、遺跡南部は62区の杭を基準にグリッドを組んだ。そのため1~39区までとそれ以南とは、グリッドに1°の違いがある。

各グリッドは一辺10m区画であるが、その中を2m区画に25区分して北西隅より東に、上より下へ平行式に番号をつけた。

調査範囲は道路を除いてはほぼ完掘したが、発掘面積は12.0000m²を数えた。

遺跡の基本土層

第Ⅰ層 表土。柔かい有機土層で、淡黒色を呈する耕作土。

第Ⅱ層 柔かい暗褐色土層で、縄文土器包含層。

第Ⅲ層 いわゆるソフトロームで褐色を呈し、26-C区では先土器時代の石器が出土する。

第Ⅳ層 ソフト化しているが、ブロック状にハードロームを含み、黄褐色を呈しており部分的に確認できる。

第Ⅳ'層 第Ⅳ層に比べてやや多く均一にハードロームを含むが、下層の黒色帯に根状に食い込む部分はソフト化している。

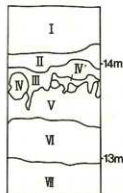
第Ⅴ層 締りのある暗褐色土層で、黒色帯と考えられる。本層の上部まで石器が出土する。

第Ⅵ層 第Ⅴ層よりも黒味が強く、黒褐色土を呈してボソボソしている。第Ⅴ層と同じく黒色帯で、両層とも武蔵野台地の第二黒色帯に該当する可能性がある。

第Ⅶ層 明褐色土層であるが、本層は下端部まで完掘していない。

当遺跡では遺構が検出できたのは9区から30区までと58区から63区までの二ヶ所であった。37区付近に僅かに縄文土器片が検出されたが、遺構は確認できなかった。当台地上の遺跡は前章でも触れたように径50~300mが一般的である。久保山遺跡は台地中央部から東縁部にかけてと、台地西縁部の二遺跡から成ると考えられる。

先土器時代の遺物は14-C区にナイフ形石器が検出されたほかは、26-C区南部および26-D区の一部にかけて石器集中地点が確認され、ブロック1と名付けた。ここではナイフ形石器のほか、多くの剝片が検出されたが、接合関係が良好であった。立地は台地のほぼ中央であるが、東から入る小さな谷に面している。遺物の出土は第Ⅲ~Ⅴ層の間に見られた。



第3図 基本土層図
(26-C-25C)

縄文時代の遺構は炉穴8基、住居跡6軒、小竪穴2基、埋甕5基、土坑33基のほか、石器の集中するブロック2が1ヶ所ある。

炉穴は早期野島式の土器を出土し、58区から63区の台地西縁部に限定して存在する。しかし26-B区の1号小竪穴覆土からも同時期の土器片が検出されている。

住居跡は16～30区に1～4号、61・62区に5・6号が分布していたが、いずれも住居間の距離はある。台地東半部と西縁部の2地域に分かれており、時期は縄文中期E式期が主体で、1・4→5・6→3のように時期により移り変っているようである。特に5号住居跡は石鎌のほか、剝片・砕片などが出土して、石器製作跡と考えられて注目される。

小竪穴も2地域に分かれ、中期の加曽利E式後半である。2号小竪穴は形態から小形住居と考えられ、台地の最も西端部に位置し、台地縁部まで17mを測る。

埋甕と土坑は台地東半部に集中するが、埋甕は距離を置いて存在するのに対して土坑は近接する傾向にある。時期は中期加曽利E式期から後期称名寺式期である。

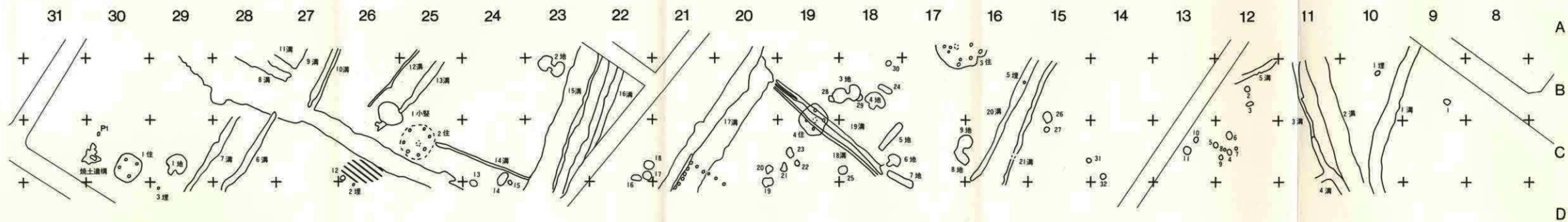
ブロック2は石鎌のほか剝片・砕片が出土しており、石器製作跡の可能性もある。61-C区を中心に広がりを見せており、炉穴に近接していることから縄文早期の時期が推測される。

中世以降の遺構は、溝21本、墓壇1基、焼土遺構1基、地下式坑9基、建物跡1軒などがある。

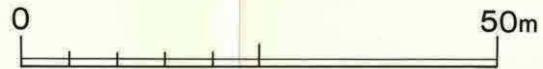
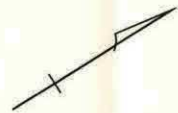
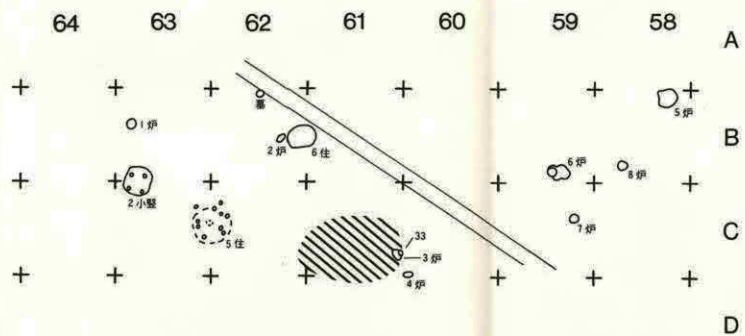
溝は台地東半部にあり、明治の地籍図に重なる、方向の類似する溝が多い。しかし1号・20号溝については、前者が中世陶器を、後者が北宋銭を出土していることから中世の遺構の存在が確認できた。両溝はほぼ平行しており、同一方位の溝として21号溝がある。このほか時期は限定できないが30-C区に板碑が出土しており、希薄ながら中世にこの台地は稼働していたことがわかる。

墓壇は台地西縁部の道路脇から検出されたが、時期が16世紀後半代と限定でき、伊奈郡代がすでに入っていた時であり注目される。また墓壇が狭いのが特徴である。

幕末から近代にかけての遺構として焼土遺構・地下式坑・建物跡があるが、焼土遺構だけがやや古いほかは、昭和の前半まで使われていたようである。



- 1. 竪穴 — 竪穴
- 2. 住居跡 — 住居跡
- 3. 小竪穴 — 小竪穴
- 4. 埋 — 埋
- 5. 番号のみ — 土坑
- 6. 溝跡 — 溝跡
- 7. 墓 — 墓
- 8. 地 — 地下式坑



第4図 遺構分布図

IV 先土器時代

明らかに先土器時代に属するものとして、本調査区からはブロック一箇所と、他にナイフ形石器が1点発見されている。これらは、大宮台地における他の先土器時代遺物の検出例と同様、必ずしも堆積状性に恵まれてはならず、しかも新幹線路線内に限られた発掘ということもあって、遺跡の調査という意味では、そのほんの一部を満たしたに過ぎない。従って、必然的に本報告で触れられる部分にも片寄りが生じ、特に遺跡論(鈴木 1983)的な記載はほとんど行なわずに終始している。

1 ブロック1

(1) 位置

ブロック1の検出地点は、グリッド26C-14・15・19・20を中心に行っている(第5図)これらの区画は、本遺跡をのせる小室支台でもほぼ中央に位置する。支台は遺跡周辺で、東西幅約700mを測る。西に高く東に向けて徐々に低くなるため、台地西縁を形成する段丘崖はより明瞭で、東縁はなだらかに沖積面下に没する。台地を侵食する小支谷は、地形の傾きを表徴するように、東半部に発達する。ブロックは巨視的には台地中央にありながらも、さらに細かく観察するとこれら小支谷との関係を考えざるを得ない。

現地形は、耕作や宅地造成のためにかなり改変されており、容易に旧地形を知ることはできないが、大縮尺の地形図でみるとブロックの東方60~70m位の所で1m程の落差のあることがわかる(第6図)。これを周辺の小支谷との位置関係で判断すると、北方に開いた支谷に連続するもののように思われる。さらに、ブロックの北方と南東方向に浅いノッチが認められ、台地そのものが南北約200mで東に50m程張り出した地形になっていることがわかる。

南関東の広大な台地上で発見される遺跡に通常の立地傾向と上述の微地形をあわせ考えると、ここに報告するブロックも、張り出し地形と密接な関わりの下に形成された感が強い。すなわち、近年の大規模発掘例をみると、遺跡の中心は段丘崖に近く位置するが、奥行が50m以上に及ぶものも存在する(阿部他 1980)。また一方で、小規模な遺跡と言えども本ブロックのように台地縁から60~70mも離れて独立し、完結するような例は管見の知る所にはない(註1)。これらから判断して、本ブロックも東への張り出し地形に従って形成された、ある程度の広がりを持つ遺跡の一部と考えた方が妥当であろう。

(2) 遺物

本ブロックは石器のみで構成される。指頭大の小礫を数点検出したが、いずれも自然作用によって混入したものと判断し、遺物からは排除

第1表 石器組成表

ナイフ形石器	UF	剥片	砕片	石核	計
8	18	79	125	2	232

した。石器総数は215点になる。この値は、本来1点の石器が複数に破損して発見された場合、接合復原して1点として集計した結果である。種類別の内分けは、ナイフ形石器6点、

使用痕ある剥片(UF)16点、剥片66点、砕片125点、石核2点である(第1表)。

(a) ナイフ形石器 ナイフ形石器5点(註2)は、形態上二種類に分けることができる。所謂一側縁加工のものが4点と部分加工品が1点である(第7図)。一側縁加工のナイフ形石器も、ブランティングの位置以外、形態的斉一性は乏しい。1のブランティングは先断形に近い。素材は、反りこそ強いが平面的には整っている。素材基部を先端としている。2の素材は、稜線に延びがなくそれほど整っているとは言えない。ブランティングも加工程度が低く、弱い鋸歯状を呈する。刃部側縁中央部にも、突出部を取り去ったような弱い加工痕を残す。素材先端をそのまま先端に利用している。基部は欠失する。3は素材の中央部を越える程に徹底したブランティングを施しており、断面形はやや丈の高い三角形になる。素材基部を先端とする。下半部を欠失する。1~3は先端が鋭く尖っている。4は同じ一側縁加工のナイフ形石器でも、先端が尖らず異質である。素材も一部に礫表を残す大型横長剥片を使用しており、あたかも剥片剝離工程初期の調整剥片のようである。ブランティングは1~3に較べて荒く、大きく波打っている。刃部側上端にも、5mm位にわたってブランティング様の加工を施している。丁度中央で二つに折れた状態で発見されている。

部分加工の5には、本資料群中最も整った素材が使われている。反りの少ない、薄手の縦長剥片である。ブランティングは素材上半部に施すが、大部分を欠失するために詳細はわからない。打面部は大きく残す。数片に割れて発見されており、3点が接合するが、上部・基部の一部を欠く。

(b) 剥片 UFと剥片は、合計82点発見されている(第7図~第11図)。16点がUFであるが、黒曜石の場合、微小剝離の肉眼的観察のみでは、発掘調査時あるいは整理途上で生じた新しい剝落なのか否かの判定が困難なので、一応両者を合わせて本項で述べる。

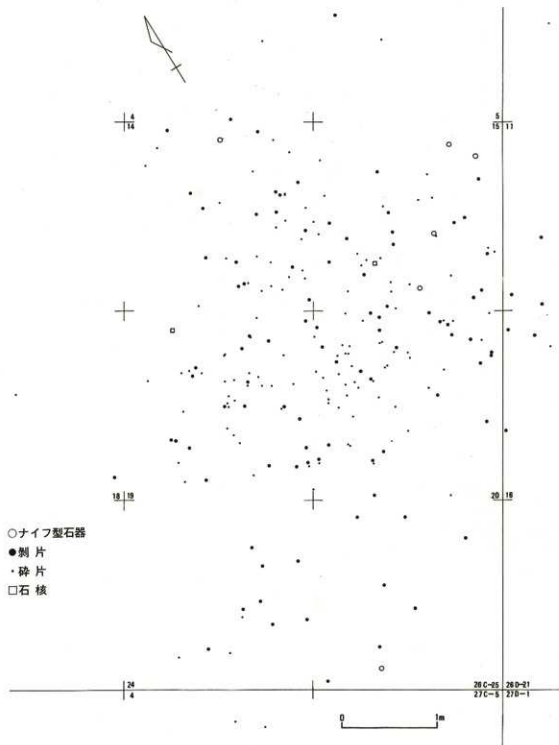
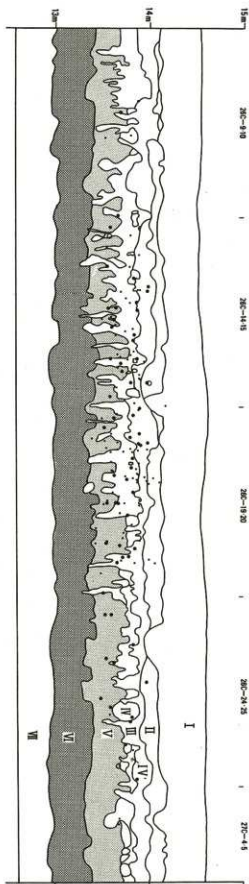
第12図~第15図は、剥片の持つ属性をグラフで示したものである。以下、これらと石器実測図から読み取れる諸特徴について列記する。

①剥片のほとんどは、最大長4.5cm以内に収まる(第12図)(註3)。これは、本ブロックから出土した二次加工のある石器がナイフ形石器に限られ、しかもその長さが3.5~5cmに収まることよく符合する。

②長幅比でみると、指数0.6~1.5の間が最も多く、次いで1.6~2.5である。縦長の剥片を得ようとする傾向が若干認められるが、それほど顕著ではない(第13図)。他の遺跡で同様の分析を実施していないので確かではないが、石刃を目的とするような技術的伝統の中にありながらも、その社会的規制が緩みつつあるような集団における、最も普通の剥片剝離技術として存在するのかも知れない。「体系」と呼べるほどの確固たる技術を保有せず、漠然と縦長の剥片を希求している状態と考えられる。横長の剥片も認められるが、量的な保証もなく、調整剥片様のものが多い。少くとも横長の剥片を得ようとする技術的傾向は認め難い。

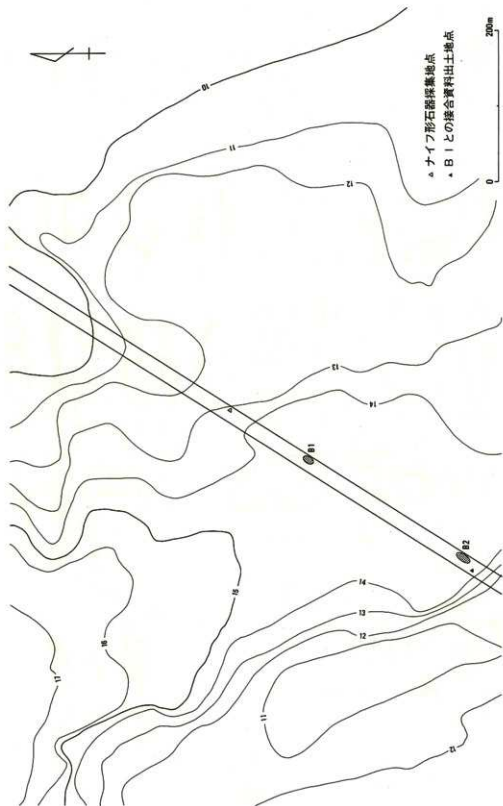
③UFは、1点を除きほとんどが3cm以上である(第12図)。やや大型の剥片を利用しているが、素材の縦長・横長を問わず、一定の傾向は認められない。

④大型剥片になるにつれて、礫表を持つ剥片の割合が増大する(第14図)。特に、総数が少ないとは言え、4.5cm以上の剥片は全てその一部に礫表を残している。このことから、調整剥片は基本的に剥片剝離作業の行なわれた場所に残されると仮定すれば、母岩は最小でも4.5cm以上の大きさを

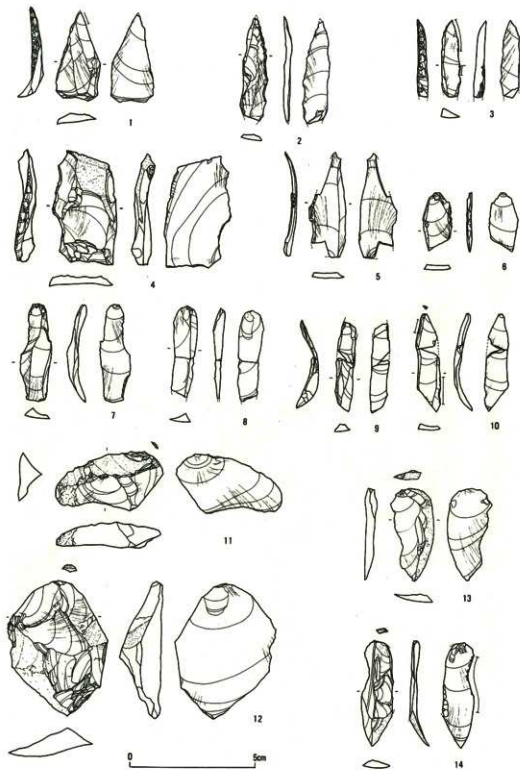


第5図 ブロック1 遺物分布図

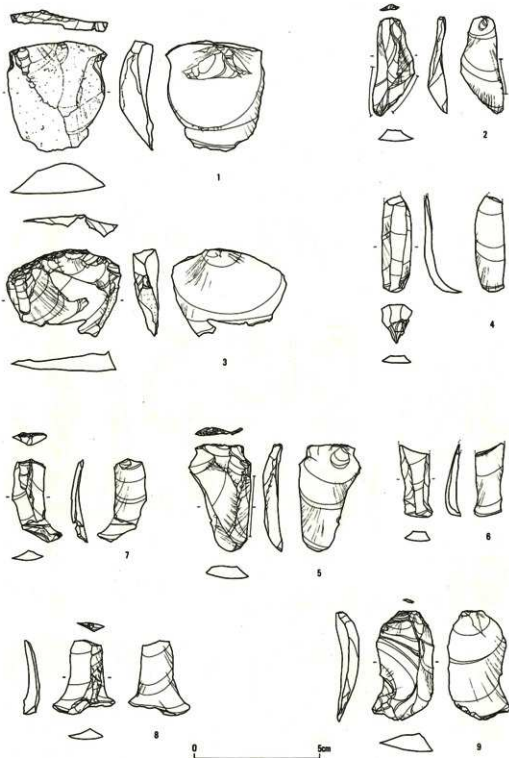
土層断面はC・Dグリッド境から東に1.5mのライン



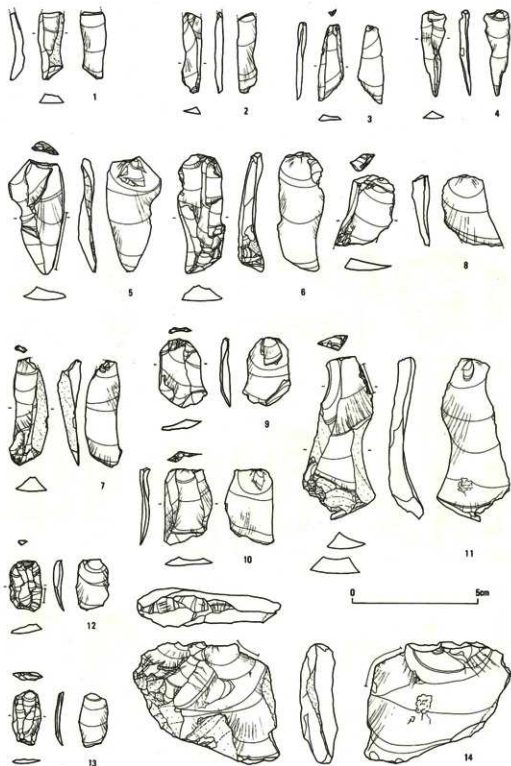
第6図 道跡周辺地形概念図



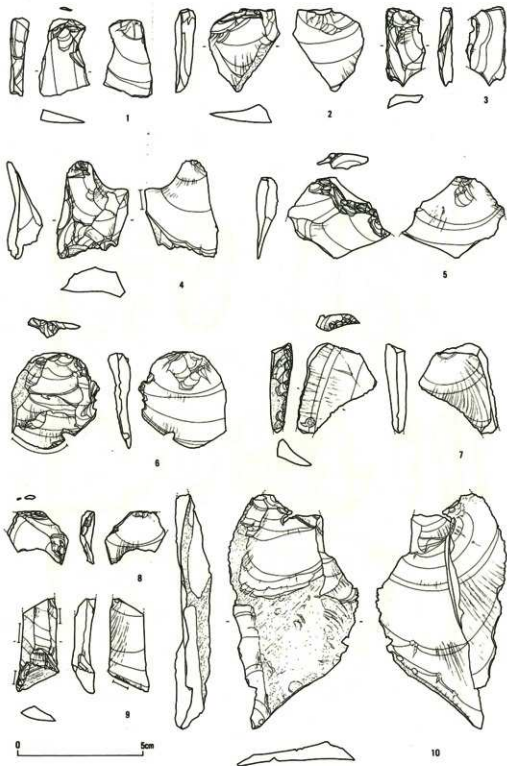
第7図 ブロック1出土石器(1) 1-5:ナイフ形石器、
6-14:剥片(接合資料No.1)



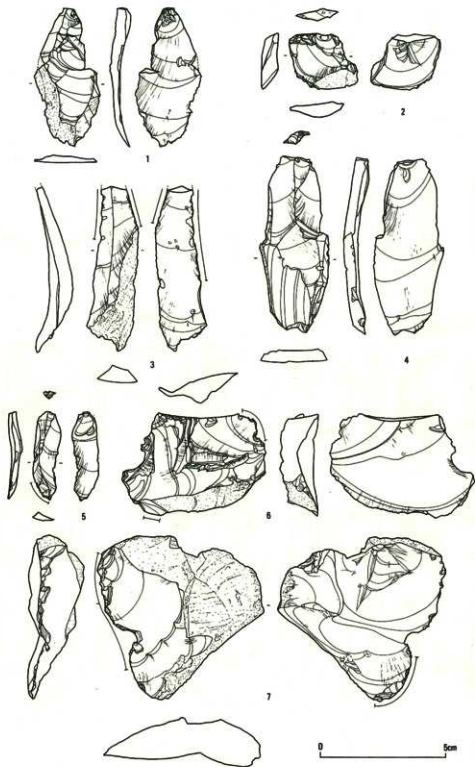
第8図 ブロック1出土石器(2)
剥片(1-6:接合資料No.1、7-9:接合資料No.2)



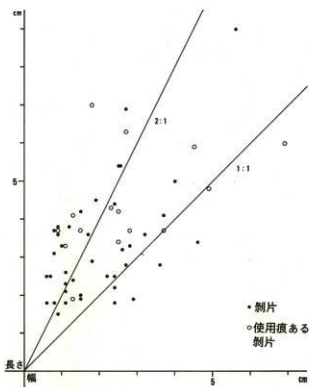
第9図 ブロック1出土石器(3)
剥片 (1-7: 接合資料No.3、8-11: 接合資料No.4、
12・13: 接合資料No.5、14: 接合資料No.6)



第10図 ブロック1出土石器(4)
剥片 (1・2: 接合資料No.6、3・4: 接合資料No.7)



第11図 ブロック1 出土石器(5) 剥片

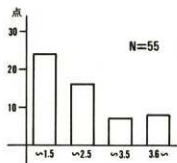


第12図 剥片長幅関係グラフ

角のこの程度の振れは大きな問題とはならなかったようである。

(c) 破片 破片は計125点発見されている(註4)。1点のチャート製を除いて、全て黒曜石である。破片については、剥片と異なり、単純に最大長を機械的に計測した(第16・17図)。剥片とは計測法が異なるために厳密な比較はできないが、長さが長くなるに従って急激に点数の減少することがわかる。一定の形態を持つ剥片が、合目的物としてブロック外に持ち出されている事実がある反面、破片はブロックに残されているために点数上の格差がこれほど大きくなると考えられる。しかし一方では、破片は発掘というフィルターを通すことで、実際の量の数分の一しか採集できていないという事実もあり、もし全破片が回収できたならば、剥片との落差はさらに大きなものとなるであろう。かつて検討されたことがあるように(阿部他 1980、阿部 1982)、ここでも3mm以下の破片は回収されていないが、人間の生理的限界としてサンプリングエラーが生じていると解される。3mm以上の破片についてはよく回収されており、かなり綿密な発掘が行なわれたと推察される。

破片の中には、明らかにナイフ形石器のブランディングの際に作出されたと考えられるものがある。第18図1は、その一つで、ブランディングの失敗によって、ナイフ形石器の先端部を剥ぎ取ってしまった例である。小片ではあるが加工は丁寧で、刃部とブランディング側の為す先端角の鋭利さから判断して、一側縁加工か本ブロックでは未発見の二側縁加工のナイフ形石器の先端と考えられる。二側縁加工のナイフ形石器は本ブロックでこそ発見されなかったが、前述したように遺跡が



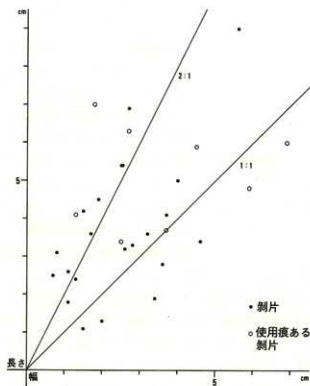
第13図 剥片長幅比グラフ

持っていたと考えることができる。

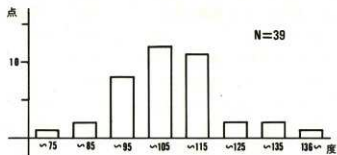
⑤剥離角は 59° ～ 136° の間にあり、計39点が計測できた。中心は 86° ～ 115° にあり、この範囲に31点79%が含まれる(第15図)。最小の 59° と最大の 136° を除く37点の平均値は 102° 、標準偏差は10,778である。かなりよくまとまっていると言えよう。後の接合資料からわかるように、同じ石核における一連の剥離工程の中でも 20° 位の変動幅は認められており、剥離

本ブロックのみで完結するとは考えられず、しかも遺跡全体として見れば、本ブロックのようなナイフ形石器には二側縁加工のものの伴うのが通例であることを考えると、その可能性も考慮しておく必要がある。

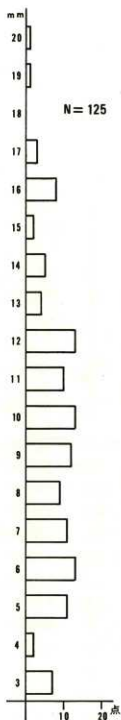
ブランディング・チップは他にも2点あり、合計3点発見されている。本ブロックからナイフ形石器が6点発見されていることを考えると、ブランディング・チップの数が少ないように感じるが(註5)、前述のサン



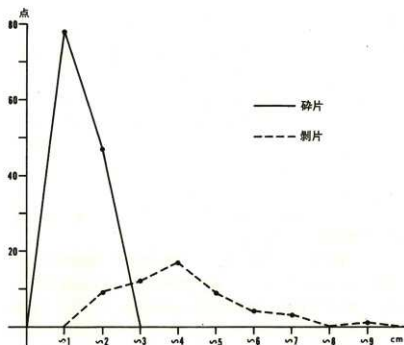
第14図 破表を持つ剥片長幅関係グラフ



第15図 剥片剥離角度分布グラフ

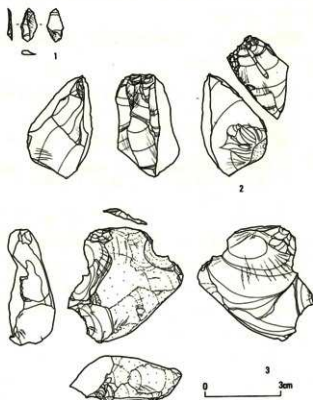


第16図 剥片の最大長分布グラフ



第17図 資料別最大長出現度数分布グラフ

プリングエラーの事実を想起する時、こうした現象は自明のように思われる。すなわち、出土したナイフ形石器のブランティング加工を観察すると、剥離面が相互に切り合って正確な大きさはわからないが、最大でも7mm止まりで、普通はサンプリング限界の2~3mm位の大きさでしかないのである。従って、排土の水洗選別を実施しない限り有効なブランティング・チップの採集は不可能と思われる。さらに、もし水洗によって大量の微細剥片が回収できたとしても、かつて「寺谷遺跡」で提示した様な属性(山下 1978)を満たす典型的なブランティング・チップの識別となると、再びその資料数は大きく減少する。従ってここでは、少くとも3点のブランティング・チップを検出し得たことで、本ブロックでナイフ形石器



第18図 ブロック1出土石器 1:破片, 2・3:石核

の調整が行なわれたことを確認し得たとするに止めざるを得ない。

(d) 石核 石核はわずかに2点確認されたにすぎない。いずれも剥片を素材とする。第18図2は大型厚手の剥片を利用し、打面の反対側縁から連続的に石刃状の剥片を取っている。打面調整は軽微である。体側の調整は施さない。打面角は100°~110°の間にあり、剥片の剥離角とよく符合する。3も大型厚手の剥片を利用するが、こちらは背面全面がかつては自然面であったようである。その主剥離面を打面とし、背面から1.5~2cm四方の小型剥片を得ている。打面調整はやはり軽微である。打面角も2と同じく100°~110°の間にある。打面の一部に剥片剥離工具の滑ったような跡が残されており、その径は $\frac{1}{8}$ ~ $\frac{3}{8}$ mm位である。

(3) 剥片剥離技術

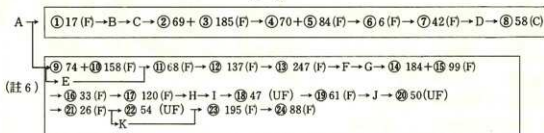
すでに石器の種類別説明の項で、剥片剥離技術の一端を知ることができるが、本項では接合資料を通じてさらに詳細・具体的な分析記載を行なう。

(a) 石材 頁岩製剥片とチャート製剥片各1点を除いて、全て黒曜石である。黒曜石には全く夾雑物を含まないものから、霞状に不純物の混入するもの、流理構造を持つように流紋岩粉がびっしりと入るものまである。しかし、後述するようにこれらの黒曜石が相互に接合する例もあり、不純物の混入度によって単純に母岩別に分けることはできない。むしろ接合資料から判断すると、母岩は数個しか使用されていないように思える。

(b) 接合資料 接合資料数は計14組にのぼるが、ここでは剥片剥離工程を窺えるものとして、多接合資料6例を選んで示した。

資料No.1 本ブロックの最大接合資料で、計24点からなる。石核を欠くものの、剥片剥離の全工程を含んでいる(第19図)。

a 群

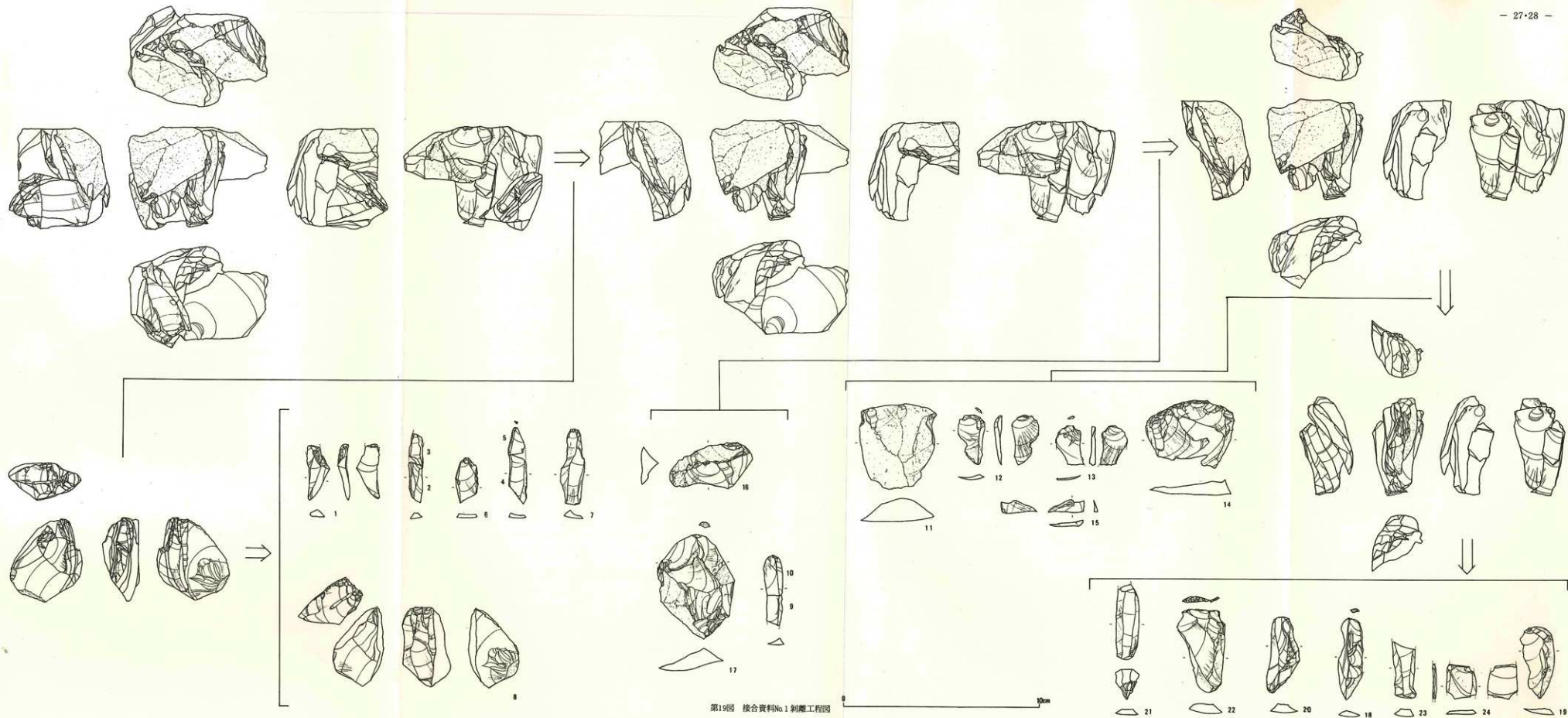


b 群

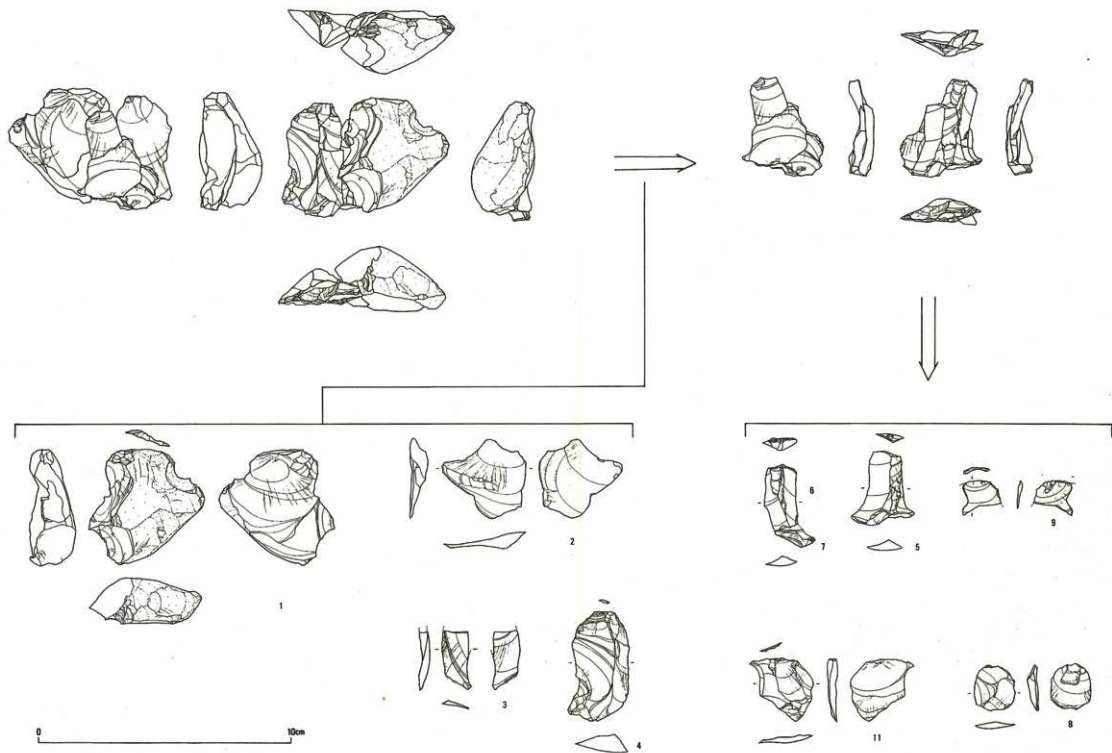
素材 拳大の黒曜石転石。径約7cm。 $\frac{1}{8}$ 位は夾雑物を含み灰白色に見えるが、他は全くの透明。

工程 Aで当初数枚の大型剥片を得た後、打面を90度転位し、自然面を打面として長さ5cm、幅4cm、厚さ2cm余りの大きな剥片を取る。この剥片を石核とした剥片剥離が一方で進行する(a群)。

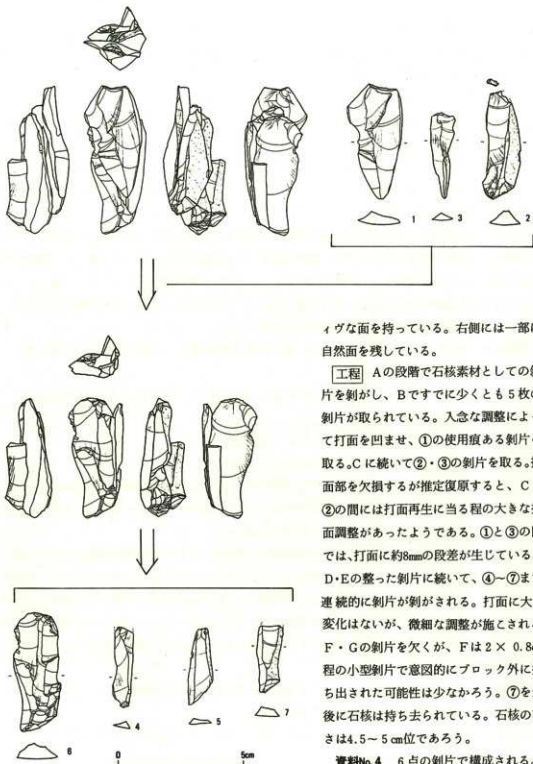
a群の素材剥片右側(註7)に、下方からの打撃で打面を作出し、下辺で剥片剥離を開始する。最初①の打面形成剥片を取る。おそらく、この打面からB・C2枚のかなり反った縦長剥片が取られている。Bは少なくとも3cm、Cは4cmの長さを持つ。次いで②+③・④+⑤・⑥・⑦の縦長剥片が打面を後退させながら連続的に剥がされる。②+③・④+⑤・⑥・⑦は3.5~4cmの長さを保っている。⑥は剥離が下端に達しなかった失敗品であろう。⑦を最後に整った剥片は剥がされていない。数回の打撃が打面から加えられているが、いずれも頭部周辺で止っており、失敗か調整打の感が強



第198图 接合資料No.1 刺離工程图



第208図 接合資料No.2 制離工程図



第21図 接合資料No.3 剝離工程図

イヴな面を持っている。右側には一部に自然面を残している。

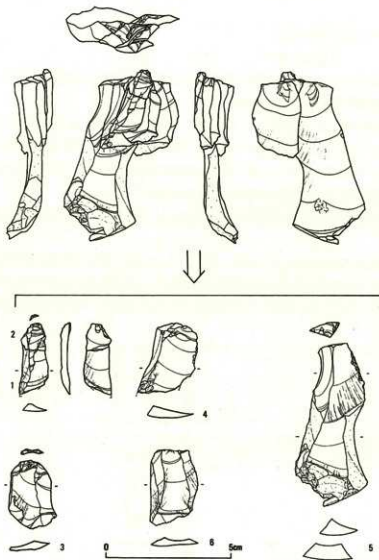
工程 Aの段階で石核素材としての剝片が剝がし、Bですでに少くとも5枚の剝片が取られている。入念な調整によって打面を凹ませ、①の使用度ある剝片を取る。Cに続いて②・③の剝片を取る。打面部を欠損するが推定復原すると、Cと②の間には打面再生に当る程の大きな打面調整があったようである。①と③の間では、打面に約8mmの段差が生じている。D・Eの整った剝片に続いて、④～⑦まで連続的に剝片が剝がされる。打面に大きな変化はないが、微細な調整が施こされる。F・Gの剝片は欠くが、Fは 2×0.8 cm程の小型剝片で意図的にブロック外に持ち出された可能性は少なからう。⑦を最後に石核は持ち去られている。石核の高さは4.5～5cm位であろう。

資料No.4 6点の剝片で構成される。剝片剝離の初期工程を示すと思われる(第22図)。

A → ① 59 + ② 194 (F) → B → C → D → ③ 93 (F) → ④ 222 (F) → E → ⑤ 24 (UF) → ⑥ 151 (F)

素材 不純物のない透明な黒曜石。自然面を多く残す。調整剥離は施さず、いきなりやや縦長の剥片を取っている。最も長い剥片は約7 cm。

工程 Aで最初に1～2枚の小型剥片を取り、次に①+②の同じく小型剥片を取る。打面は母岩が転石であった時につぶれた角を利用しているようである。続いてBの小型縦長剥片、Cの寸詰まりの剥片、Dの剥片を取る。細かな打面調整の後、③の縦長剥片を取る。④はこれまでのものに比べ格段に大きい剥片で、剥離前に打面調整を施こそうとした痕跡が認められる。次に再び小型の縦



第22図 接合資料No.4剥離工程図

長剥片Eを取った後に、最大の剥片⑤と小型の⑥を剥がしている。

資料No. 5 わずかに4点の接合である。全てが2×1cm位の小剥片で構成されており、調整剥片相互の接合と考えられる(第23図)。

A → ① 13 (F) → ② 249 (F) → B → ③ 161 (F) → C → ④ 72 (F)

素材 筋状に夾雑物を含む黒曜石。

工程 Aで5～6枚の小型調整剥片を取った後、①・②の小剥片を続けて剥がす。Bの3枚程の小剥片に続いて③を取る。さらに少くともC、3枚の小剥片を剥がし、最後に④を剥がしている。打面調整は、いずれの場合にも認められない。

資料No. 6 わずか3点から成る。いずれも調整剥片と考えられ、剥片剥離工程初期に該当しよう(第24図)。

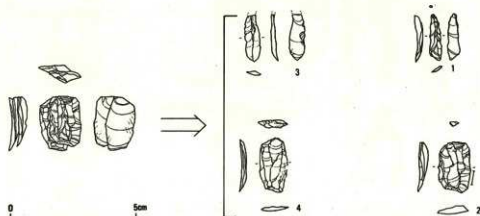
A → ① 115 (F) → ② 117 (F)
 ↓
 ③ 121 (F)

素材 透明度の高い黒曜石。流紋岩粒をまれに含む。礫を大きく残しており、少くとも最大長7cm以上の角礫を利用したことがわかる。

工程 ①の表面に残る剥離痕から、Aで少くとも4枚の形の整わない自然面を大きく残した剥片が剥がされたことがわかる。①に続いて②・③と剥がされるが、②と③の剥離順序は確定できない。自然面に近いためか亀裂が多く、①・②とも打面の形状が一定しない。②は①と同じ方向から剥がされるが、③ではほぼ90度打面が移動し、側面から剥がされている。

以上6例に認められる技術的特徴をまとめながら、本ブロックにおける剥片剥離技術を評価しておく。

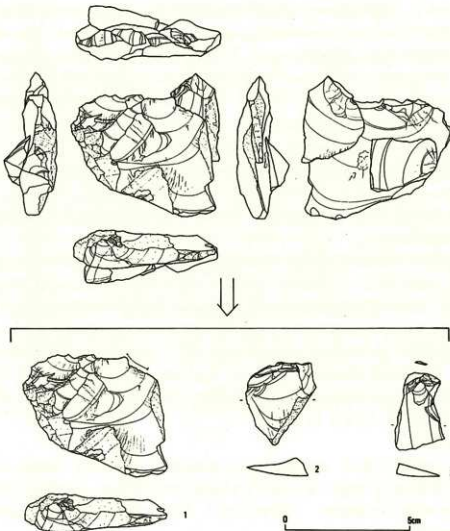
剥片剥離に供される母岩の大きさは、資料No.1・2・4・6から知られる所では7cm以上である。しかも、それぞれが剥片剥離の初期工程の調整剥片から推定された大きさであることを考えると、さらに一回り大きい、径10cm位のもの考えてよいように思う。また、自然面を残す大型剥片から



第23図 接合資料No.5 剥離工程図

判断すると、母岩は露頭面から採取されたのではなく、転石として流出したものを利用しているようである。

礫塊として持ち込まれた母岩には、最初に荒割りとも調整ともつかぬ加工が行なわれる。これが資料No.1・2・3・6に見られる工程である。No.1・6からは大きな石核調整が最初に行なわれたように思えるが、同様にNo.1・2・3ではこの石核調整の段階で得られた大型剥片が石核に転用されていることを知る。特にNo.3から想定される石核は大型の剥片で、調整剥離とするよりはもはや母岩の半割といった工程の存在を考えた方が妥当であろう。また、No.1に見られるように調整剥片としては大型厚手のものが、見事に石核に転用されている事も事実であり、この段階では、母岩の大きさによって荒割りと調整が適宜使い分けられていたと考えられる。しかし調整加工は必ずしも手順を追って系統的に施されたのではなく、任意性が高かったようである。No.1を見ると、打面を



第24図 接合資料No.6剥離工程図

頻繁に移動しながら円形に近い大型の調整剥片を剥がして行き、ある程度縦長の剥片を取ることができるようになった段階では、すでに母岩の $\frac{1}{3}$ 以上は消費している。No1で縦長の剥片を取ようになるのはB→⑦、⑩→⑫に至ってからである。これは、当時の黒曜石入手の困難を考えると非常に無駄が多いように思われる。

そうであるとするれば、縦長剥片でなくとも、また大きく自然面を残していようと、我々の価値観とは別の判断からそれらを使用するという伝統があったと考えるべきなのであろうか。これを検討するためには、二次加工のある石器と素材との関係を吟味してみる必要がある。そこで本ブロックのナイフ形石器を検討してみると、必ずしも「形が整っている」という意味で我々の意識と符合する剥片が利用されている訳ではない。第7図1の様に反りの強いものもあれば、同図4の様に自然面を持つ横長の素材を利用しているものもある。特に後者の例は、背面の剥離痕の観察からも、通常では「大型の剥片剥離工程初期の調整剥片」と分類される素材である。

これに加えて、自然面を持つナイフ形石器が通常の現象か否かを検討するために、資料No1の仮想剥片（服部・矢島1974）群A～Kの再吟味を試みた。A～Kは本来ならば本ブロック外に残されているはずの資料であるが、発掘時のサンプリング・エラーを考慮して、小型剥片と思われるD・F～Hについては問わない。残るA～C・E・I～Kをブロック外の目的地に持ち出されたものと想定し、それぞれの形態・点数を考えてみると、A…大型調整剥片数枚、E…中型調整剥片数枚、B・C・I～K…縦長の整った剥片8枚以上となる。AとEは両方を加えてもおそらく5枚以下である。

以上から考えて、確かに剥片剥離工程初期の剥片を高い頻度で利用したことが窺えるが、やはり最終的な石核あるいは大型厚手の調整剥片を利用した石核から剥がされる縦長剥片を究極とする伝統を持っていることがわかる。(2)-(b)で認められた「漠然と縦長剥片を希求している状態」よりは、縦長剥片への欲求がやや強いように思われる。(2)-(b)では単純に定量化し過ぎたが、本項の結果と矛盾するものではない。

縦長の目的剥片の剥離に当っては細かな打面調整を施しながら、(2)-(b)-(d)で見たように剥離角 90° ～ 110° で打撃を加えている。角柱状の、母岩の芯を利用した石核は未発見であるが、資料No2に見るように、下方からの石核調整は行なわれたようである。石核側面への調整の有無は定かでない。剥片素材の石核では、資料No1・3のように素材の木口面を正面として剥片剥離を進めている。狭い作業面で打点をジグザグに移動しながら剥片を取るために、必然的に剥片の横幅は制限されることになり、有効な縦長剥片が得られたと思われる。このような、縦長剥片剥離段階に入ってから整然とした秩序と、そこに至るまでの調整剥離段階の無駄といった不整合性こそが、本ブロックの剥片剥離技術上の特質と言うことができよう。

(4) 遺物の分布

本ブロックに属する遺物は、26C-14・15・19・20区を中心に、東西約5m・南北約7mの広がりを持つ。東方では、一部26D-11・16区にも分布を広げている(第5図)。分布は求心性が高く、26C-19区中央部・20区北西部の二ヶ所に中心を持つ。中心から南方への分布の広がりは特に散漫である(第25図)。

26C-9・10の南北境界線を南に延長し、その両側1mの遺物をA-Bの土層断面に投影すると、

垂直分の中心は3層下半から4層にあることがわかる。3層は漸移層で、4層は4層の膨軟化した層であることを考慮すると、本来の主たる遺物包含層は4層である可能性が高い。5・6層が黒色帯に該当するため、少くともそれよりは新しい段階の石器群であることがわかる。垂直分布は凸レンズ状で中心線はほぼ水平で、地形面とよく符合する(第6図)。

(a)ナイフ形石器の分布 合計6点のナイフ形石器があるが、2点がII種接合遺物であるので、8片の資料の分布を見つめる。これらは、全体分布の中心からわずかに北にずれて26C-14・15区に多く分布する。南方では、4m程度離れて1点分布するのみである(第26図)。

第7図4は約1m、同図5は約1.7m離れて接合している。

(b)剥片の分布 剥片は全体分布よりわずかに狭く、約4×6m程の分布域を持つ。概して均等に分布しており、全体分布のような求心性は窺えない(第26図)。比率から見ると、全体分布の周辺部では剥片の分布率が高く、逆に中心部では剥片の分布率が高い。使用痕ある剥片は特別な傾向を見せず、剥片の中心に万遍なく散っている。

(c) 剥片と石核の分布

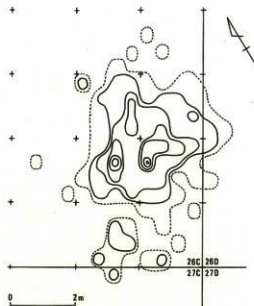
剥片は、全体分布の中心となる26C-14・15・19・20区でほぼ完結的に分布する。この区画外にあるものは、126点中わずか9点にすぎない。集中部の中では19区中央・20区北西部に特に密集しており、遺物の全体分布とまさに一致する。また集中部内でも分布の濃淡は明瞭で、まだらな分布を見せている(第27図)。これらのことと、先の剥片の分布を合わせ考えると、全体分布に認められた求心性は、まさに剥片の分布に由来していることがわかる。

石核はわずか2点であるが、中心からは若干ずれた北側に分布する。

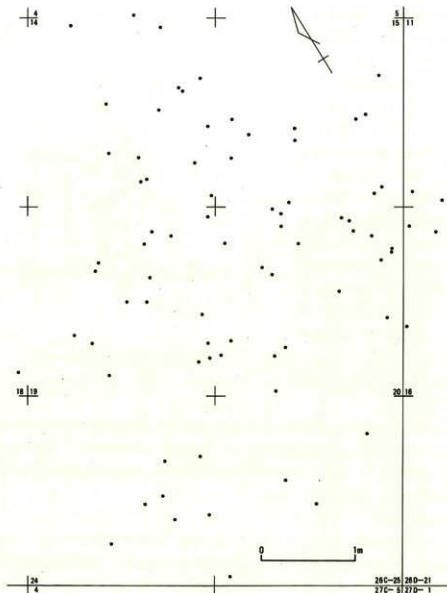
(5) 接合資料の分布

ここでは、多量接合資料のNo.1～4とII種接合資料について述べるが、挿図には資料No.5～8も示した(第31図)。

資料No.1 本資料は、(3)-(b)で示した如く、大きくa群とb群に分けられる。①と②の間には、未確認の剥片が数枚あり、剥片剥離工程上の空白があるためか、接合距離は3mとやや長い。②-⑦



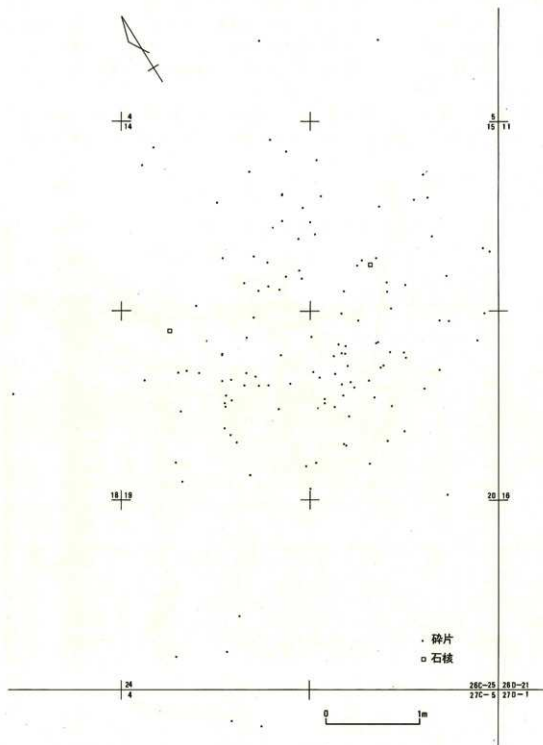
第25図 遺物分布等量線図(註8)



第26図 剥片分布図

までは、連続して剥がされた剥片が全て残されている。接合距離には統一性がなく、0.5~2m位の幅がある。II種接合も2例含まれるが、それらもそれぞれ0.6・1.5mの接合距離を持っている。⑦・⑧の間には、数回の失敗剥離の痕跡を認めるが、接合距離は2mとそれほど遠くない。

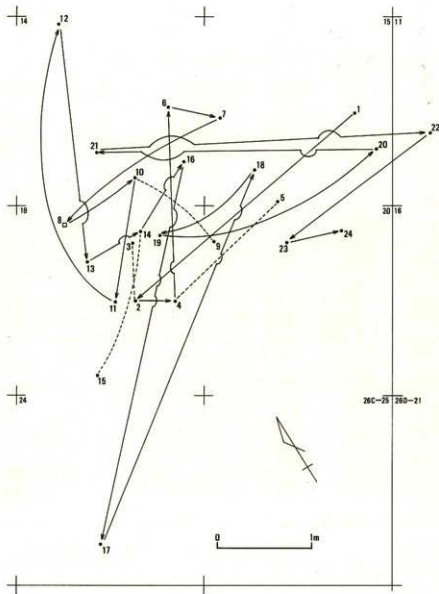
⑨以下はb群である。a群の素材となる剥片を取った後、引き続いて同じ石核から剥片剥離が行なわれる。⑨+⑩と⑪の間には、複数の剥片剥離と打面転位があるが、接合距離は1.3mと短い。⑪~⑮は一部に未発見の調整剥片を含むが、一連の工程と見做すことができる。⑪・⑫は3m、



第27图 碎片·石核分布图

⑬は2.5m離れたの接合である。⑮と⑯の間では何枚かの剥片剥離と90度の打面転位が行なわれるが、両者の接合距離は1mに満たない。逆に、⑯・⑰は連続して剥がされているが、遠く4m以上離れている。⑰・⑱間にも、やはり90度の打面転位があるが、この場合には4m余り離れて接合している。⑮以降⑳までは、一部に資料の抜け落ちはあるものの連続的に剥片剥離の行なわれた様子がよくわかる。接合距離には0.5~3.5mまで変動があり、全く一定しない(第28図)。

本資料全体の分布を見ると、剥片剥離工程上の画期が必ずしも資料の移動幅の大小と相関を持っていないことがわかる。連続した工程中にも大きな移動があったり、打面転位とか数多くの資料の



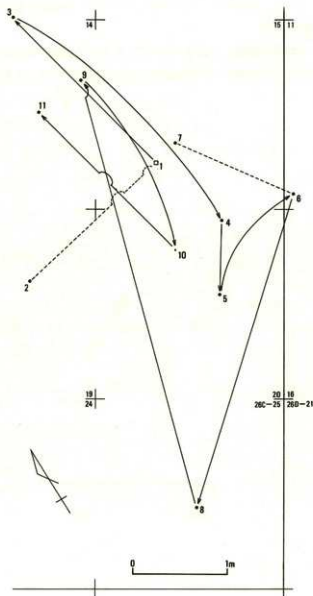
第28図 接合資料No.1 分布図

抜け落ち（おそらくブロック外への搬出）があるにもかかわらず、ほとんど移動がなかったりである。その中でも⑩の例は異常で、資料全体の分布が26C-14・15・19・20区の境界当りにあることを考えれば、⑩のみ26C-24区南部まで意図的に移動させられたとした方がよからう。

資料No.2 ①+②はII種接合とは言っても、剥片剥離に際して②がバルバースカーとして弾けたものである。①は後に石核となっており、両者の接合距離が1.8mというのはむしろ短かいようにさえ感じる。③-⑦は一連の剥片であるが接合距離には1~3mまで幅がある。⑦・⑧の間では調整剥片の剥離と打面の180度転位が行なわれ、これに符合するように接合距離も3.5m程と長い。⑧-⑪は連続的に剥がされた調整剥片様の資料群である。資料の性格上、意図的に移動させられる可能性は最も少ないにもかかわらず、いずれも2m以上の接合距離を有している。特に⑧・⑨間は4.5mを越えている（第29図）。

本例でも資料No.1と同じく、⑧のような異質な動きをする剥片が認められた。資料全体では26C-15・20区境当りが分布の中心となるにもかかわらず、⑧のみは26C-25区南半まで隔っている。しかも⑧は2cm四方にも満たない小型の剥片で、とても人間による意図的な移動は考えられないものである。

資料No.3 本例では、自然面を残すが比較的整った剥片群が接合している。①・②は1.6m程しか離れていないが、この間には少なくとも1枚の剥片剥離と、大きな打面調整が行なわれている。②-⑦までは若干の資料が抜けてはいるが、細かな打面調整を施しつつ連続して剥片



第29図 接合資料No.2 分布図

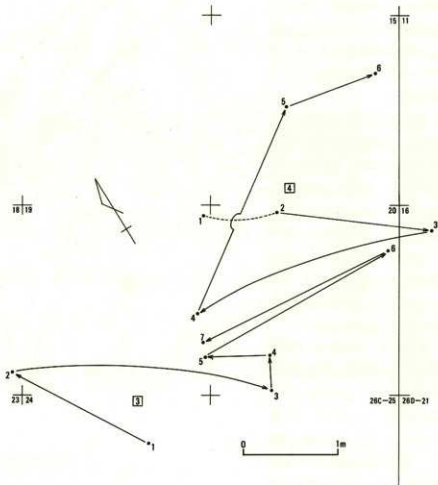
を取っている。この間の接合距離も0.4~2.7mとばらつきが激しい(第30図)。

本資料は、遺物の全体分布からは若干はずれて、26C-20区南西隅周辺に多く分布する。しかし資料No.1・2ほど明瞭には中心部を指定し得ず、従ってそこから離れて分布する資料についての評価も難しい。

資料No.4 2点を除き、いずれも小型剥片である。①~⑥まで、数点の未発見資料を含め、連続的に剥がされている。①・②のII種接合が0.8m、⑤・⑥が1mである以外、2.5m程の安定した接合距離を持っている(第30図)。

分布は、遺物全体分布の東半に片寄るが、構成剥片数が少なく、かつ接合距離が長いために中心は定かでない。

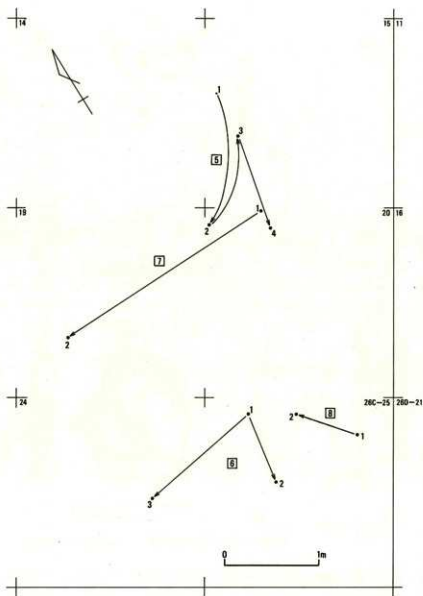
II種接合資料 II種接合資料は、前述のI種接合資料群中に含まれるものも合わせて、計13例である。これにはナイフ形石器の2例も含まれている。これらの分布は、遺物全体分布の中心から北



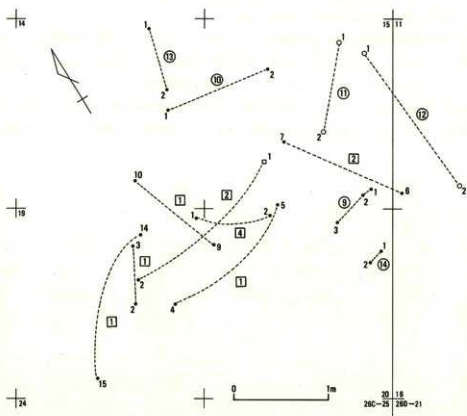
第30図 接合資料No.3・4分布図

東側にやや多い(第32図)。接合距離の平均は約1mになる。最も遠い例は資料No12のナイフ形石器で1.5m余り、近いのはNo14の剥片で20cmに満たない。

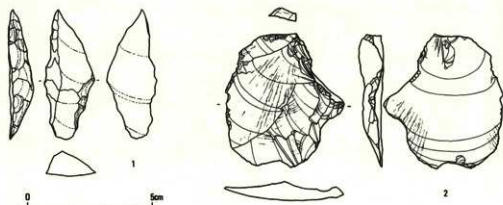
以上、接合資料の分布と特に接合距離について詳述した。ここで、多接合資料No.1～4までの接合距離平均を求めると、No.1 a群-162cm、No.1 b群-226cm、No.2-245cm、No.3-164cm、No.4-210cmとなる。これを接合群の性格と照合してみると、最も調整剥片を多く含むと思われるNo2が245cmと最も遠い接合距離を示していたり、より目的々なNo1a群が162cmと短かったり、当初の予想に反する結果を示している。予想は、目的々な剥片を多く含む資料ほど、移動させられる機会は多くな



第31図 接合資料No.5・6・7・8分布図



第32図 II種接合資料分布図



第33図 ブロック外出土の石器 1:14C区、2:62C区

り、従って接合距離も延びるのであろうというものであった。しかしこの結果にもかかわらず、一方でII種接合資料群の平均99cmはかなり上回っている。この結果と、(4)-(b)・(c)の剥片と砕片の分布結果とを照合すると、剥片は本ブロックに放置されたという関係において、より目的々か否かを問

わず、調整剥片であれより整った剥片であれ同じ待遇をうけたものと察せられる。本ブロックにもたらされるまでの経緯は別にして、少くとも本ブロックの構成員となって以後は、移動という要因に対して全ての資料は同じあつかいを受けたと思われるのである。その中でII種接合資料がより短かい接合距離を示しているのは、やはりブロック内へ廃棄後の折損を考える必要があるであろう。

2 ブロック外

ブロック外から出土した確実に先土器時代に属する遺物は、第33図1のナイフ形石器のみである。これは縦長剥片を利用し、基部・先端とも折断することで作り上げられた、所謂二側縁加工のナイフ形石器の典型である。先端に近い左側縁のプランティングは、主剥離面からに加えて背面からも施している。石材は凝灰岩と思われる。

出土地点は14C区で、第2層中から縄文時代の遺物に混じて出土している。ブロック1とは約120mの距離があり、間にわずかにではあるが浅いノッチが入ることを思えば、別の遺跡の存在を考えた方が妥当であろう。出土地点から、至近の東へ開く浅谷までは20m程の距離しかなく(第6図)、両者の位置から判断して調査区のすぐ東方に先土器時代遺跡の埋もれている可能性が高い。

このナイフ形石器以外に、先土器時代に属する蓋然性が高いものとして、第29図2の黒曜石の剥片があげられる。これは63B-20区の第2層から縄文時代の遺物と伴に出土したものである。この剥片が、遠くブロック1で発見された剥片と接合しているのである。63B区の周辺では他に先土器時代の遺物の発見例はなく、ブロック1からも約260m隔っており、所属に苦慮する所である。260mという距離から考えて、当然ブロック1とは異なる遺跡になるが、先土器時代人に想定される周期的移動生活の中に、わずか数100mという移動があったと考えるべきなのであろうか。その場合には、調査区の外側に63B区に関わる遺跡の中心部を考える必要がある。

もう一つの可能性として、先土器時代の剥片を縄文人が再利用したことを考えておかねばならない。剥片には使用によると思われる微小剥落痕はあるが、これがいつの時代のものかは定かでない。水層を調べることでこの判断はできるが、そのためには資料を破壊しなければならず首肯し難いところである。また接合距離を考えると、再利用した縄文人はよほどの幸運に恵まれて、剥片を発見し捨てたと想定しなければならぬ。260mと言えば、日本でも最長距離の接合になろうが、十分な評価を下し得ないのが路線幅のみの発掘の持つ限界性と言えるかも知れない。

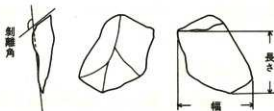
註

- (1) 本当の意味での遺跡の広がりや追求しようとするれば、集落の単位の割り出しという難問を処理しなければならない。しかしこれは現在の我々の持つ分析力では満足な解決を得られるものではない。また、実際の発掘報告書でも集落構成に意を注いだものは例外的に存在するのみである。従って、本稿で述べる所も、「同一遺跡のほぼ同一水準から発見される一連の遺物群の広がり」と言う程度の意味でしかない。この程度の規定であっても、実際の発掘報告にあっては、発掘範囲による制限であるとか、逆に発掘範囲が十分であり過ぎる(広過ぎる)ために、トレンチとかグリッドによる発掘間隔が開き過ぎ、十分に

遺跡の広がり把え切れていないうらみがある。希望的な見解を述べれば、遺跡の広がりを知らうとすれば、少なくとも2m間隔以内の密度で試掘を実施する必要があると考える。

(2) 整理開始当初に6点あることが確認されているが、実測図作製前に1点を粉失してしまった、整理を任された者として遺憾の限りである。

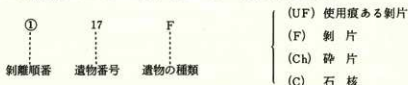
(3) 第12図は、完形品と推定復原が可能なる55点の剥片の計測結果から作成されている。計測方法は右図に示す通りである。



(4) 剥片と碎片の分類規準は、最大長1.5~2cmに置いた。1.5~2cmの間に分布する資料については、形態の判断に基づいて定性的弁別を行なった。本ブロック出土のナイフ形石器で、註2で触れた資料は他に較べて格段に小型であったことが知られている。このため、その小型ナイフ形石器に加工され得る有資格剥片を目的剥片の最小限界とし、剥片の境界を1.5~2cmとした

(5) 6点のナイフ形石器が本ブロックで調整加工されたか否かが前もって問われるべきだとも考えられるが、その検討そのものがブランティング・チップの分析対象となっている。基本的に、ブロックの石器組成にナイフ形石器が含まれているか否かと、ブランティング・チップの検討は次元の異なる問題と解されるのである。

(6) →は剥離順序、+はひとつの剥片の折れたものの接合(Ⅱ種接合)。



A…剥離痕から推定できる工程

(7) 剥片は、打面を上にして背面から見た図を平面図とし、それぞれ、右、左、下を決定している。

(8) 第25図は、50×50cm中に分布する遺物の点数を集計し、階級幅2点で等量線を引いている。ただし、破線は1点である。

参考文献

- 阿部祥人 1982「先土器時代の微細遺物」史学第52巻2号
 阿部祥人・伊藤富治夫・中津由紀子 1980『はけうえ』
 鈴木忠司 1983「日本細石文化の地理的背景」『考古学叢論』
 鈴木道之助・清藤一順・大原正義他 1978『佐倉市星谷津遺跡』
 服部久美・矢高国雄他 1974『春日台・下耕地遺跡』
 山下秀樹 1980「石器の分布」『静岡県寺谷遺跡発掘調査報告書』

V 縄文時代の遺構と遺物

1. 炉 穴

炉穴はいずれも58区より南の台地縁辺部に集中して検出された。大形炉穴は3・5・6号であるが、重複しているためであろう。遺物は土器片が4・5・6号炉穴に多い。

遺構 (第34図～36図)

1号炉穴 (第34図) 63-B区で検出されたが、炉穴群の南端で台地の傾斜の始まるところに位置する。平面形態は長径1.0m、短径0.94m、底面で長短径0.74mの円形を呈する。深さは0.22mで、断面形態は中央部にやや高まりを持ち、壁は急傾斜で直線的に立ち上がる。

2号炉穴 (第34図) 6号住居跡に隣接する62-B区で検出された。平面形態は楕円形を呈し、長径1.15m、短径0.73m、底面で長径0.88m、短径0.55mを測る。深さは0.16mで、壁はやや緩やかで直線的に立ち上がる。長軸方向はN-6°-Eを指し、炉穴北半部に焼土が厚く確認できた。また焼土面の上には大形土器片が出土した。

3号炉穴 (第34図) 61-C区で検出されたが、36号土坑に一部切られている。長径2.22m、短径2.28mの中に4～5の炉穴が切り合っている。切り合いについては不明瞭であるが、最も深い部分で0.3mを測る。炉穴中央に径0.25m、深さ0.25mのピットがあるが、性格不明である。浅いためか、出土遺物が少ない。

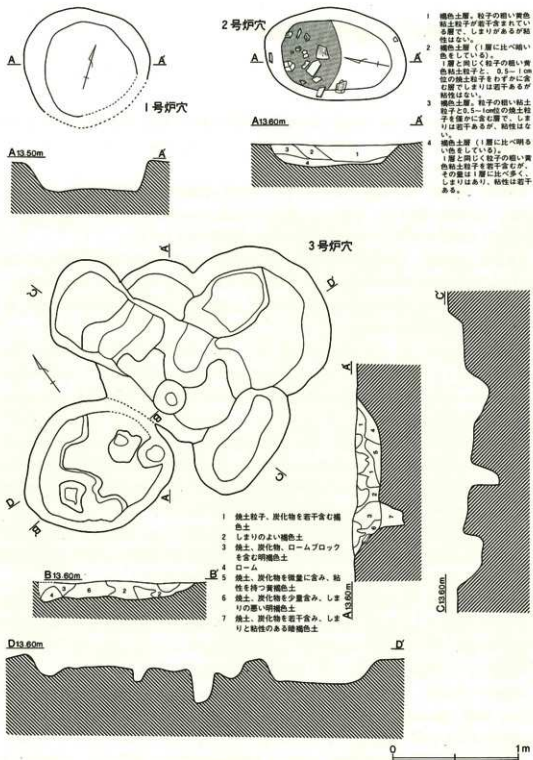
4号炉穴 (第35図) 3号炉穴の近く、60-C区から検出された。平面形態は楕円形で、長径1.72m、短径0.9m、底部で長径1.3m、短径0.61mを測る。深さは0.63mと深く、断面形態は底部で凹凸が著しく、壁は急傾斜で立ち上がる。長軸方向はN-32°-Eを指し、北に寄って焼土が厚く確認できた。遺物は多いが、覆土内の下位から上位まで散乱していた。

5号炉穴 (第35図) 遺跡内では最も北寄りの58-B区で検出された。平面形態は不整形を呈し、長径1.8m、短径1.78mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上る。炉穴北側に僅かに焼土の堆積がみられた。遺物は底部に少なく、覆土上層に多い。

6号炉穴 (第36図) 59-B区から検出された。平面形態はいくつかの炉穴の重なりのため、不整形を呈する。長径2.15m、短径1.6mを測る。焼土が3ヶ所に確認できたが、焼土までの深さは0.15～0.22mである。炉穴の南端には足場であろうか、炉穴の底面からさらに0.49mの深さを持つピットが確認できた。遺物は多く、足場と考えられる部分からも出土している。

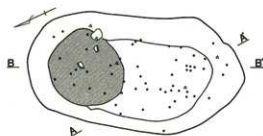
7号炉穴 (第36図) 59-C区で検出された。平面形態は一部括れる不整形を呈する。長径1.15m、短径0.75mを測る。中央に焼土面が残るが、周辺部よりも約0.15m高くなる。遺物はほとんど検出できなかった。

8号炉穴 (第36図) 58-B区で検出された。平面形態はほぼ円形で、長径0.9m、短径0.85mを測る。断面形態は浅い皿状を呈し、壁の立ち上がりは急である。深さは0.17mを測る。焼土は北東半にあり、遺物は検出できなかった。



第34図 1・2・3号炉穴

0 1m



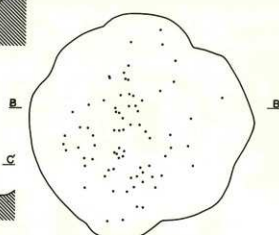
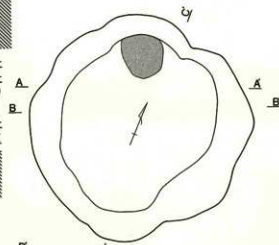
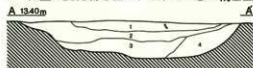
- 1 褐色土焼土粒と炭化物を若干含み、しまりがよく粘性のある褐色土
- 2 褐色土焼土粒と炭化物を含み粘性のある明褐色土
- 3 暗褐色土を含み、粘性のある明褐色土
- 4 2層と類似するが、しまりがよく粘性のある黄褐色土

4号炉穴

5号炉穴

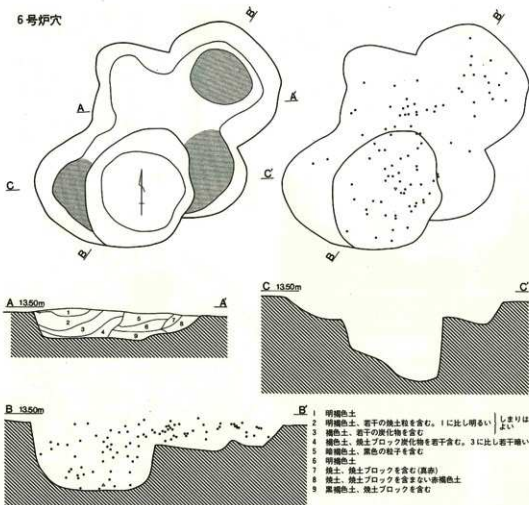


- 1 少量の焼土、微量の炭化物を含む明褐色土
- 2 微量の焼土、少量の炭化物を含む黄褐色土
- 3 焼土ブロックと微量の炭化物を含みしまりのない褐色土
- 4 微量の炭化物を含み、しまりの悪い褐色土



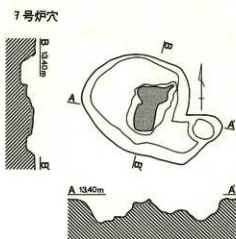
第35図 4・5号炉穴

6号炉穴

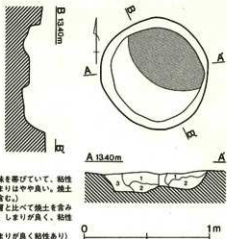


- 1 明褐色土
- 2 明褐色土、若干の焼土粒を含む。1に比し明るいしまりはよい
- 3 褐色土、若干の炭化物を含む
- 4 褐色土、焼土ブロック炭化物を若干含む。3に比し若干暗い
- 5 暗褐色土、黒色の粒子を含む
- 6 明褐色土
- 7 焼土、焼土ブロックを含む(黒赤)
- 8 焼土、焼土ブロックを含まない赤褐色土
- 9 黒褐色土、焼土ブロックを含む

7号炉穴



8号炉穴



- 1 褐色土 (黄味を帯びていて、粘性はないがしまりはやや良い。焼土粒子をやや含む。)
- 2 褐色土 (1層と比べて焼土を含み黄味を帯び、しまりが良く、粘性高い)
- 3 褐色土 (しまりが良く粘性あり)

第36図 6・7・8号炉穴

遺物

炉穴出土土器

炉穴より出土した土器は全て縄文早期貝殻条痕文系の土器であり、おおむね野島式の範疇でとらえられるものである。第2号炉穴～第6号炉穴の覆土中より、以下に図示したような土器の出土を見たが第1・7・8号炉穴内からは拓図できるような土器の出土はなかった。出土した土器は破片のみであり、復元できるような大形の土器は出土しなかった。

第2号炉穴出土土器（第37図1、2、4～8）

1. 小突起を持つ口縁部の破片である。口唇部には刻みが認められる。表は貝殻条痕が密にはっきりと施文される。裏面は磨耗がはげしく条痕が消えかかっている。2. 細隆起文の施こされた口縁部の土器である。細隆起線間をうずめるように細沈線が密に施文される。4. 口唇部がつまみ上げられるように細くなる。文様は口唇部下の無文部の膨らみ部分より施文されている。条痕は器面が表裏とも荒れているのであまり明瞭でない。5. 4ほどではないが口唇部は若干細くなる。膨らみ部分より条痕が施こされる。裏面は荒れており、あまり明瞭でない。7. 表は条痕が縦位に密にかなりしっかりと施文されている。裏は剝落がはげしく条痕が縦に施文されているのがかすかにわかる。8は表のみ条痕が施こされていた。裏面には擦痕状の痕跡がみうけられる。

第3号炉穴出土土器（第38図9・10）

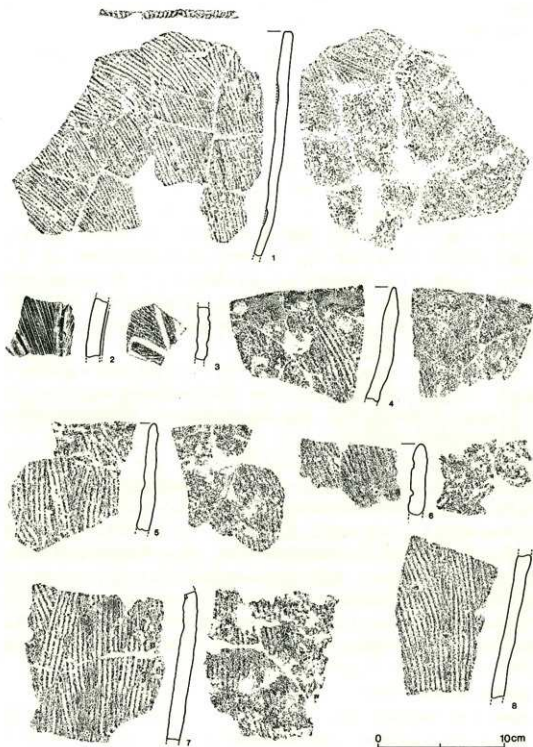
9. 細隆起線を平行に二条施こしている。それに斜行するようにやや太目の沈線で細沈線間を充填するものである。地文には貝殻条痕を施こしている。裏面は条痕が鮮明でなく剝落しており、かろうじて観察できる。胴部の破片であり、縦位に条痕が密に施文される。裏面は器面が荒れており、かすかに条痕を見うけることができる。

第4号炉穴出土土器（第37図3、第38図11～16）

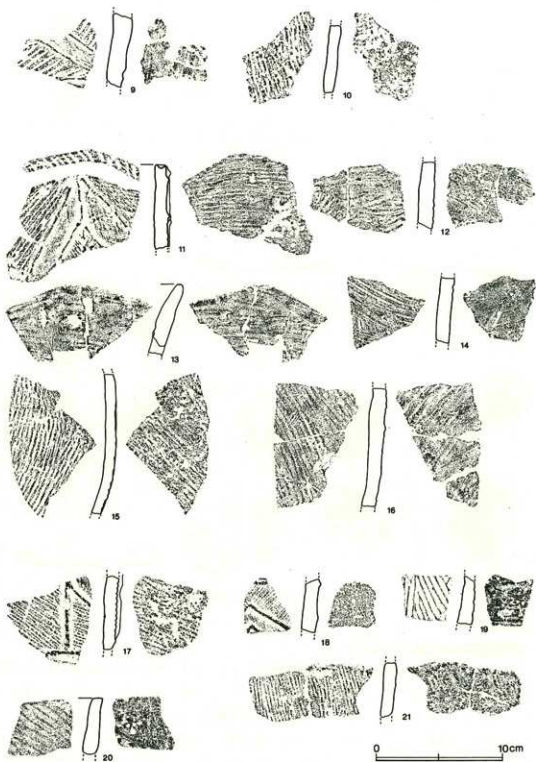
第37図3. 2本の太い沈線を平行に施文し、幾可学的な文様を構成し内側を細沈線により充填させるものである。2本沈線内には細沈線は外側ほど密に施文されない。第38図11. ゆるい波状を呈する口縁部の破片である。口唇部の形状は口唇上を平担にし、その上に斜めの刻みを入れる。文様は地文に条痕を持ち、波状部より真下に細隆起線を一条降し、斜行する細隆起線を左右に二条ずつ付し、細沈線でその間を充填する。裏面にも横位に貝殻条痕が施文される。13. 小波状を条する口縁部の破片である、口唇部は11に比し丸くなる。文様は表裏とも条痕がうすく施こされている。かなり乾練してかり施文したのかもかもしれない。12・14～16は胴部の破片である。11・14は表に条痕を横走させる。裏面には条痕が施文された。15・16は表面ともに条痕を施文する、16は表と裏の施文が異なっている。裏面のほうが条の間隔が広がっている。

第5号炉穴出土土器（第38図17～21、第39図）

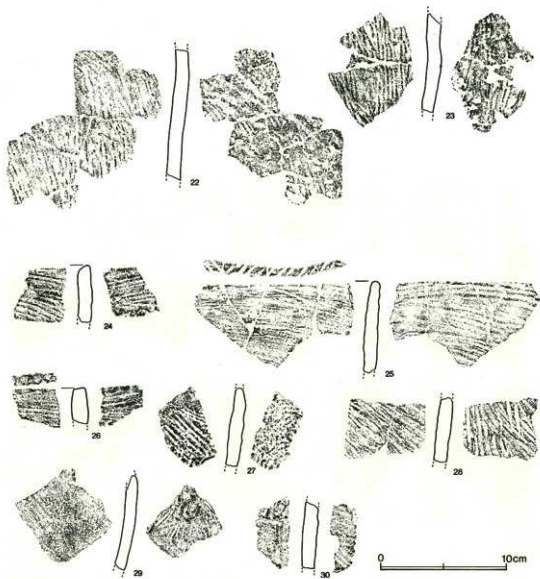
第38図17・18. 口縁部の破片であり、口唇部を欠損している。地文に貝殻条痕を持ち、細隆起線により、幾可学的な文様を描き細隆起線間に細沈線を密に施文するものである。19は沈線により文様が描かれる。沈線外の部分が細隆起線のように見うけられる。縦に2本の沈線を描き、それに斜行する沈線を描くものである。20. 幅の広い条痕が斜行する。裏面の条痕は明瞭でない。21～23は表裏ともに条痕が付される。一般的に裏面の方が器面の荒れかたが著しい。



第37图 炉穴出土土器(1)



第38图 新穴出土器(2)



第39図 伊穴出土土器(3)

第6号炉穴出土土器 (第39図24~30)

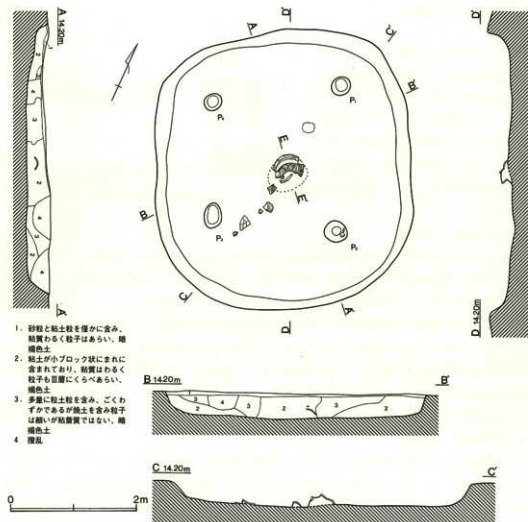
24~26は表裏とも条痕の施された口縁部の破片である。25は口唇部に斜めに刻みを入れている。刻みの方向は途中で変更されている。裏面には口唇に沿って条痕が2本1組の沈線のように描出されている。26. 口唇部には小さなハイガイの貝殻圧痕を施文している。竹管状の刻みをハイガイで行なったもので施文具の転換である。ハイガイの背圧痕を口唇部に押しつける手法は貝殻を施文具にして行う多くの時期に見うけることができる。27~30. 表裏ともに条痕の施された胴部の破片である。

2. 住居跡

遺構 (第40図～49図)

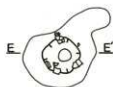
第1号住居跡 (第40・41図)

30-C区に検出され、隅丸方形を呈する。長軸は4.43m短軸は4.0mを測り、N-23°-Wを指す。壁は0.4m前後で、壁付近が僅かに高いがほぼ平坦である。壁の立ち上がりは緩やかであり、上部にて徐々に急になる。周溝は確認できなかったが、柱穴は4本検出できた。径は0.26~0.37mとやや細く、深さは0.4m前後であった。柱穴間は、P₁とP₂が最も広く2.3m、P₃とP₄が最も狭く1.8mを測る。炉の上には大形土器が伏せられた状態で出土した。炉の大きさは長軸0.77m、短軸0.58m、



1. 砂粒と粘土粒を僅かに含み、粘質わるく粒子はあらい、暗褐色土
2. 粘土が小ブロック状にまれに含まれてあり、粘質はわるく粒子も百層にくらべあらい、暗褐色土
3. 多量に粘土粒を含み、ごくわずかであるが粘土を含み粒子は細いが粘質ではない、暗褐色土
4. 覆土

第40図 第1号住居跡



第41図 第1号住居跡炉跡

深さ0.17mを測る。炉の覆土は1層焼土、炭化物を少量含み、しまりのある褐色土。2層赤色を帯びて焼土粒子を含む橙褐色土。3層2と土質は類似するが、焼土を多量に含む橙褐色土。住居跡の覆土は粘土粒を含む褐色土が主体である。遺物は炉の直上から出土した大形土器の他は、少量の土器片だけである。

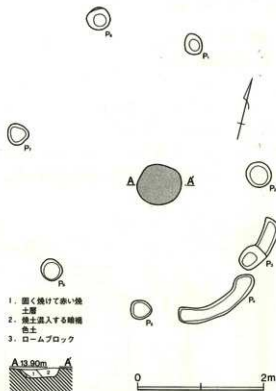
第2号住居跡 (第42図)

1号小竪穴に近接する25-C区で検出された。壁の立ち上がり不明確であるため、平面形態は不明であるが、柱穴の配置から推測するに円形に近いと考えられる。長軸 P_4-P_8 は5.26mで、短軸 P_2-P_8 は3.96mを測り、長軸は $N-36^\circ-W$ を指す。柱穴は8本確認できたが、 P_4 は深さが0.06mと浅く、住居跡に伴うものか不明である。柱穴の深さは P_1 が0.09m、 P_2 が0.16m、 P_3 が0.22m、 P_5 が0.13m、 P_6 が0.13m、 P_7 が0.21m、 P_8 が0.43mを測る。床は攪乱が著しく、不安定である。炉は柱穴群の中央僅か南に位置する。炉の長軸は0.71m、短軸は0.67mを測り、深さは0.14mである。断面は浅い皿形で、覆土には厚い焼土が堆積していた。

出土遺物はほとんど検出できなかった。

第3号住居跡 (第43図)

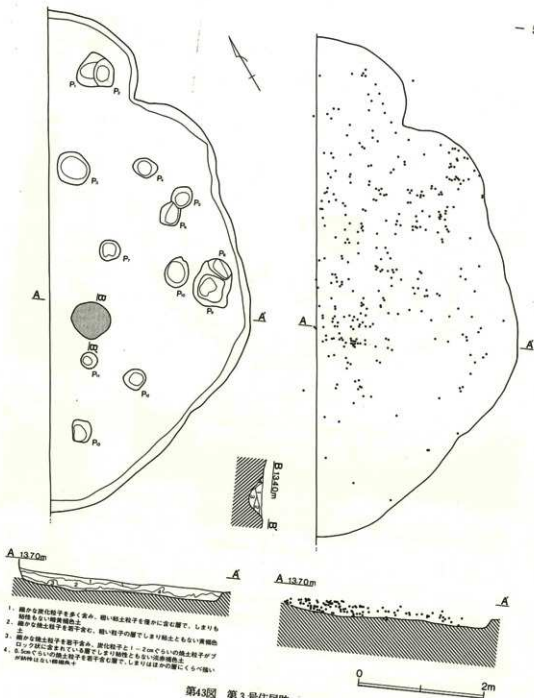
台地の東側斜面へ傾斜が始まる地点にあり、発掘区東端の住居跡である。16・17-A・B区にわたって検出されたが、西半分は発掘区域外で未掘である。形態は円形よりも隅丸方形に近いと考えられるが、不明確である。特に $P_1 \cdot P_2$ が伴うのか否かによって形態も違ってくるが、遺物の散布・土層から考えるに、同一遺構の可能性はある。規模は $P_1 \cdot P_2$ が伴うならば、7.88mを測る。深さは0.2m前後と浅く、壁は緩やかに立ち上がる。周構はないが、柱穴は13本確認できた。最も深いのは P_2 の0.77mであり、続いて P_9 の0.47m、 P_5 の0.29m、 P_8 の0.27m、 P_3 の0.24mを測るが、他は0.2



1. 掘り残して赤い焼土層
2. 焼土混入する暗褐色土
3. ロームブロック

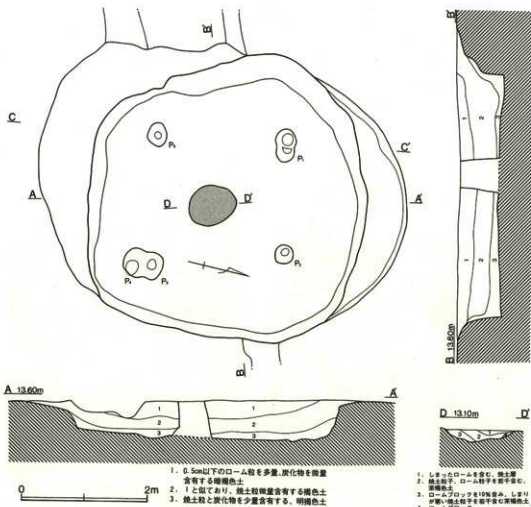


第42図 第2号住居跡



第43図 第3号住居跡

m以下である。炉は長軸0.63m、短軸0.58mを測る円形であるが、断面形は深さ0.22mを測る楕円状である。炉の覆土は、1層細かな炭化粒子を多く含み、粗い粘土粒を僅かに含む層で、しまり粘性ともない暗褐色土。2層細かな焼土粒子を若干含み、しまり粘性のない黄褐色土。3層細かな焼土粒子と炭化粒子がブロック状に含まれる淡赤褐色土。4層0.5cmぐらいの焼土粒子を若干含み、粘性はないがしまりの強い暗褐色土。



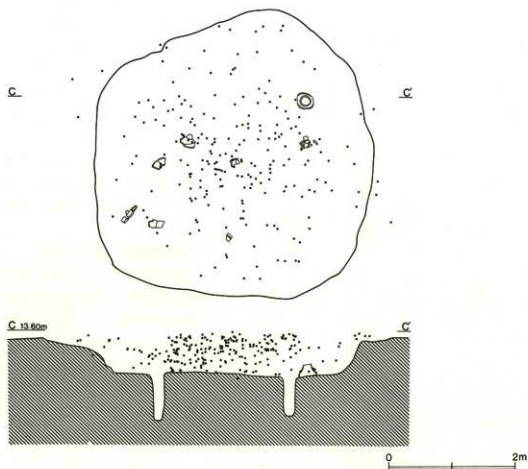
第44図 第4号住居跡(1)

住居跡の覆土はローム粒の混入する、しまりのある土である。

遺物は炉の周辺、あるいは北半部から多くの土器片が出土したが、床面から浮いた状態の土器が多かった。

第4号住居跡 (第44・45図)

第3号住居跡と同様、台地の東緩斜面の始まる地域に位置し、19-B・C区にわたって存在している。上部を18・19号溝によって切られる。形態はほぼ隅丸方形に近いが、西北隅がやや張り出す変形五角形のようなものである。規模は長軸4.55m、短軸4.43mを測り、長軸方向はN-98°-Wを指す。壁は垂直に近い急傾斜を持って立ち上がり、壁上部において緩傾斜に移行して大きく開いている。壁の急傾斜の立ち上がりは北・東側にて幅0.5m前後であるが南側では0.27mである。また掘り込み確認面からの深さは、北半部で約0.75mで、南半部で0.42mを測る。柱穴は4本柱と考えられるが、P₁は東西位置に2本の重複が確認でき、P₂とP₄は建て替え時の柱の移動であろう。深さはP₁が



第45図 第4号住居跡(2)

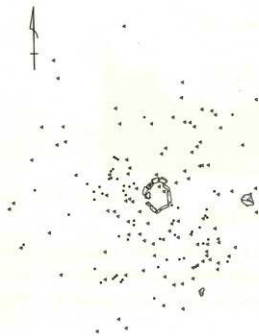
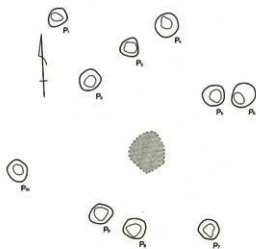
0.77m、 P_2 が0.70m、 P_3 が0.53m、 P_4 が0.65m、 P_5 が0.62mを測るが、深さの割には径が細く、0.3m前後である。周溝は確認できなかったが、壁と床の変換部が鋭角になる部分が多かった。炉は柱穴間の中央に検出されたが、長径0.77m、短径0.62m、深さ0.19mを測る。焼土層は覆土上部に確認できた。

住居跡の覆土は、焼土・炭化物を少量含む褐色土である。

遺物は復元可能な土器が数点出土した他、多くの破片が住居跡中央付近の覆土中に散乱していた。

第5号住居跡 (第46・47図)

発掘区南端部である台地西縁の、62・63-C区に検出された。当初、土器小片・石器のチップ類のみ出土して、遺構の確認が不明瞭であった。途中石組の炉が確認されるに至って住居跡と伴明したが、壁の立ち上がりは検出できなかった。そのため遺構の形態は不明確であるが、遺物の散布状況から、規模は1辺4.5～5mの住居跡と考えられる。壁は不明確であるとともに、床面も不安定であった。柱穴は10本検出されたが、径が0.25～0.4mを測る。深さは P_1 が0.43、 P_2 が0.64、 P_3 が0.38、 P_4 が0.61、 P_5 が0.55、 P_6 が0.57、 P_7 が0.42、 P_8 が0.32、 P_9 が0.28、 P_{10} が0.75mを測るが主柱穴は不



13.60m

・石器
・土器

0 2m

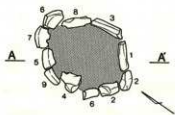
第46図 第5号住居跡

明である。炉は柱穴群のほぼ中央から検出されたが、当遺跡では唯一の石皿を転用した石囲炉である。石は合計11点使用されていたが、10点が石皿の破片であり、2組が接合した。炉の覆土は、1層焼土を含む暗褐色土、2層は1層と同一だが焼土が少ない。

遺物は土器片の量は僅かであるが、石鏃の他、剝片・砕片・石核などが出土しており、石器加工作業場の可能性はある。

第6号住居跡 (第48・49図)

遺跡南端部の61・62-B区に検出された。南西部で2号炉穴と近接して、南隅で新しい掘り込みと切り合っている。掘り下げる段階では、南で重複しているため、不明遺構とされたが、覆土上層から石棒の破片が、また床面が検出されるに至り、住居跡と認定され

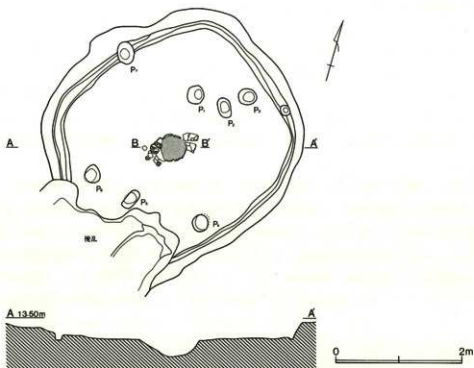


A 13.60m A



0 1m

第47図 第5号住居跡炉跡

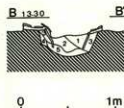


第48図 第6号住居跡

た。形態は隅丸方形を呈し、長軸4.0m、短軸3.7mを測る。長軸はN-43°Eを指す。壁は高さ0.25mを測り、斜めに立ち上がる。周構は壁に接して幅0.05~0.2m、深さ0.05~0.1mで全周確認できた。柱穴は7本検出され、径は0.2~0.4mで、深さはP₁が0.46m、P₂が0.1m、P₃が0.47m、P₄が0.78m、P₅が0.41m、P₆が0.25m、P₇が0.44mを測る。どれが主柱穴となるか不明確であるが、P₃・P₄・P₆・P₇が四角形となり可能性がある。しかし壁に平行せず疑問も残る。炉は長径・短径とも0.4mの円形を呈し、深さは0.25mを測り、断面は楕鉢状である。炉には大形土器の上半部が使われており、覆土は1層焼土粒子を若干含み、粘性のある褐色土、2層焼土粒子がやや大きく、炭化物を含み、1よりやや明るい褐色土、3層全体に焼けて、焼土・炭化物を多量に含む赤褐色土、4層焼土粒子を含むローム層、5層焼けて焼土・炭化物を多量に含み、しまりのある褐色土。

住居跡の覆土は1層しまりのやや悪いローム粒子を多量に含む暗褐色土、2層炭化物・焼土粒子を微量に含む黒褐色土、3層炭化物・焼土粒を多量に含む暗褐色土。

遺物は覆土出土の焼けた石棒の他、多くの土器片が出土した。



第49図 第6号住居跡炉跡

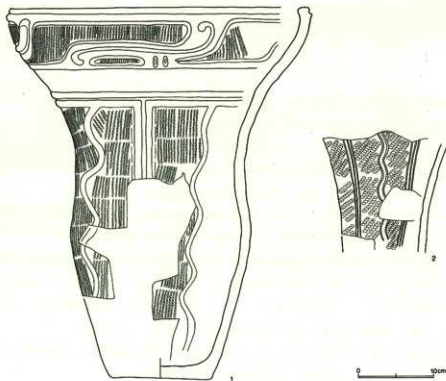
遺物

a. 土器

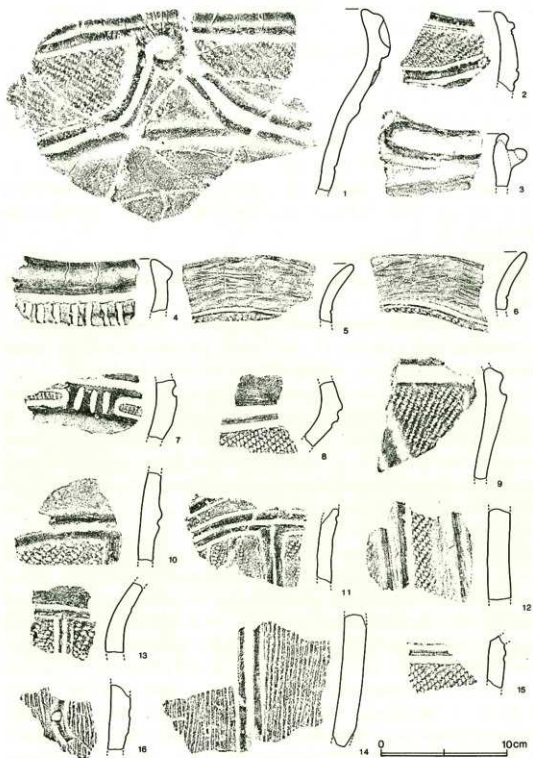
第1号住居跡出土土器 (第50図1・2、第51図1~15)

第50図1. 口径39.6cm、器高48.5cmのキャリバー形をした深鉢形の土器である。ほぼ復元しえた。口縁部の文様は隆帯を貼付し、隆帯間に沈線を施すものである。の字状の文様を施し、口縁部と胴部文様の間は無文化する。施文順位は撚糸文L→隆帯→沈線の順である。胴部の文様は一本隆帯による懸垂文であり、垂直と蛇行する隆帯を交互に施している。2. 口縁部と底部を欠損している。やはりキャリバー状の形態を示す。文様は半載竹管状工具により、平行に蛇行する沈線が描かれる。R L縄文→沈線の順に施文する。色調は黄褐色、胎土に白い小礫を含み、焼成はあまり良好でない。

第51図1. 口縁部のやや大形の土器片である。2本の隆帯により口唇部を一巡させると同時に垂下させ口縁部の区画文構成し、隆帯間にの字状の沈線を施文する。頸部は無文化する。R L縄文→隆帯貼付→沈線の順に施文する。色調は黄褐色、胎土には大きめの小石を含む、焼成はあまり良好でない。2も2本隆帯間に沈線を施すものである。L R縄文→隆帯貼付→沈線の順に施文している。色調黒褐色、胎土緻密、焼成極めて良好。3. 小波状を描く口縁部である。楕円区画を隆帯により作り出すものであり、他の部分は良く磨かれている。4. 口縁下に隆帯を付し、沈線で隆帯



第50図 第1号住居跡出土土器(1)



第51图 第1号住居跡出土土器(2)

下を一巡させ、縦に沈線を施すものである。縦→横の順に施文する。5・6は同一土器の破片である。口縁部は全体的に外反しラップ状に開く、口縁部は丁寧に良く研磨されている。頸部には1本の沈線が横走する。以下 $R < \frac{L}{2}$ 縄文が施こされる。極めて焼成の良い土器である。7. 沈線により区画された口縁部下半部の破片である。区画内には原体Lの燃糸文が施こされており、楕円区画の間には3本の刺突状の沈線が描き出されている。頸部は無文化している。8～11・13は頸部から胴部にかけての破片である。隆帯と沈線により、口縁部下無文部と胴部の文様を分離している。縄文は全て $R < \frac{L}{2}$ である。8・9は1本隆帯の両側を沈線で深く太く描いている。特に9ははっきりとしている。10・11・13は隆帯間に1本の沈線もしくは2本隆帯には両側を沈線で描いている。12・14～16は胴部の破片である。2本隆帯による懸垂文を持つもの12・14・16のように1本隆帯を蛇行させながら描くものが見うけられる。12・13・15は $R < \frac{L}{2}$ 縄文の縦回転、14・16は原体Lの燃糸文を施こしている。

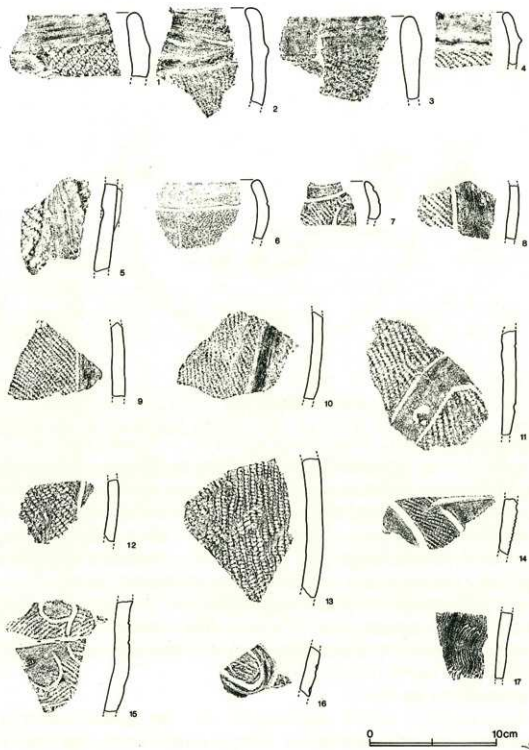
第3号住居跡出土土器 (第52図1～17)

土器は全て覆土中より出土したが破片であり、細片が多く、図示した以外はほとんど文様は不明である。

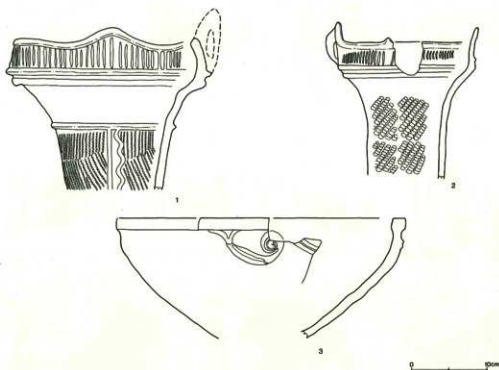
1～5は微隆起線文の施こされた土器である。口縁部無文部下に一条の微隆起線文を横走させ、以下斜行縄文を施文するものである。1・5のように懸垂文を持つものもみられる。1・2は微隆起線の両側に沈線を施こしている。3は微隆起線があまり明瞭でない。2・5は $R < \frac{L}{2}$ 、1・3・4は $L < \frac{R}{2}$ 縄文を施こしている。6～12は沈線による磨消しの懸垂文を持つものである。6は直線的に垂下する懸垂文を有するものであり、7・11は逆「U」字状の懸垂文を有する土器である。一般的に沈線は細線化してきておりだらしなくなる。14・15は沈線内に $L < \frac{R}{2}$ 縄文を充填するものである。14は太く明瞭な沈線が施こされる。15は沈線の末端が曲線を描くものである。16. 曲線の沈線内に細沈線又は櫛歯条線の充填された土器である。極めて焼成が良い。17. 4本単位の櫛歯条線により器面全体に描き出すものである。

第4号住居跡出土土器 (第53図1～3、第54図1～9)

第53図1は口径24cmの底部を欠損した土器である。口縁部に2つの大小の把手を持ち、ゆるい波状を呈する。口縁下に結節状の沈線を縦位に密に施こしたのち隆帯を貼付し文様帯をつくり出している。頸部は無文化し、胴部には原体Lの燃糸文が全面施文されたのち、2本の隆帯を横位に貼付し無文部と区画し、縦位に隆帯の懸垂文をつくっている。造りは一般的に粗雑である。色調は暗褐色、胎土はやや荒い小礫を含み、焼成はボロボロで極めて悪い。調査時においては、隆帯を剝落し土器身体も取り上げに難儀したものである。2. 口径18.8cm、把手と底部を欠損しているがほぼ完形である。キャリアー状の形態を示し口縁部は直立していく。1と同様へら状施文工具による沈線が縦に施文されたのち隆帯を貼付して文様帯を構成する。頸部は無文化する。胴部には大きめの荒い縄文 $L < \frac{R}{2}$ が全面施文される。色調は暗褐色であるが場所により黒褐色を呈する。胎土は細砂を含み、焼成はやや良好。3. 約1/3程度残存する浅鉢形の土器である。口径38.4cm、口縁部はやや内湾する。口唇部は肥厚し、口唇は平らになる。口唇直下より隆帯によるY字状の貼り付けが見られ中に∞字状の沈線を描き、器面は丁寧に磨かれる。色調は明赤褐色、胎土は細砂を含み、焼成は極



第52图 第3号住居跡出土土器



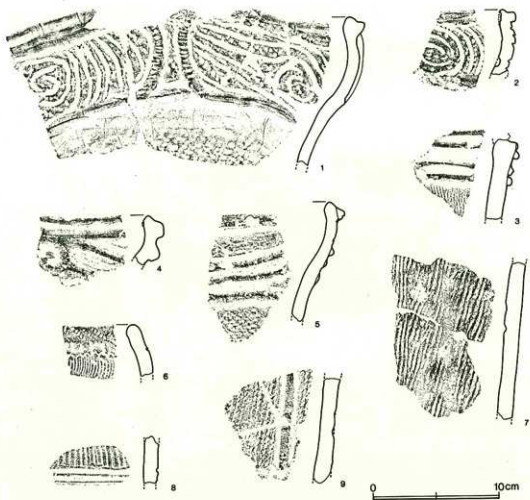
第53図 第4号住居跡出土土器

めて良好である。

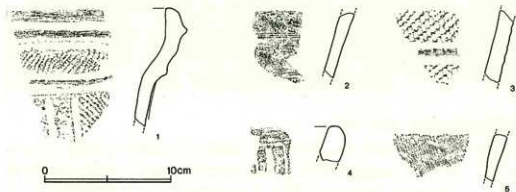
第54図1. キャリバー形の大形の口縁部破片である。口縁部は $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施したのち、隆帯により楕円区画を作り、隆帯上に刻みを施している。区画内に同心円状の沈線、口縁部に平行する沈線を充填するかのように描き、隆帯にそって沈線を描くことによって口縁部文様帯を構成している。頸部は無文化し、胴部には $R < \frac{L}{L}$ 縄文が施文される。2. 1同様 $R < \frac{L}{L}$ 縄文を地文として付し沈線によって同心円状の文様が施されるものである。3～5は2本の隆帯を貼付する口縁部の破片である。3は口縁部下半部であり、隆帯を平行に貼付し、間に沈線を描くものである。4・5. キャリバー形の口縁部破片である。5は $L < \frac{R}{R}$ 縄文を施している。6. 口縁部下に $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施し、小さな弧線と楕歯が施こされる。7・9は原体Lの燃糸文が施文された胴部の破片である。9は隆帯による懸垂文があり、両側に沈線を描いている。8. 口縁部の下半部である。縦に沈線を引いたのち横位に沈線を描いている。

第5号住居跡出土土器 (第55図)

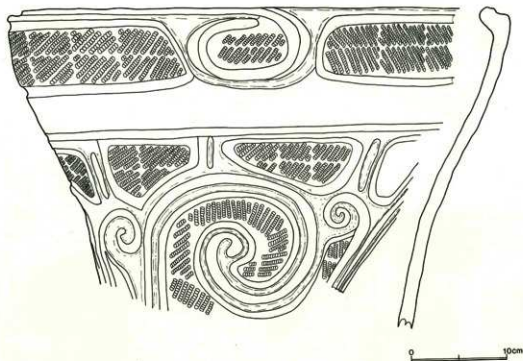
前述のとおり壁の立ち上がりがなく遺物は少ない。1. 口縁部に隆帯で楕円区画で文様を作り出すものである。隆帯の両側には沈線が描かれる。胴部には太い沈線により磨消しの懸垂文が施文される。縄文は $L < \frac{R}{R}$ である。2. $R < \frac{L}{L}$ 縄文施文後竹管状施文具による平行沈線が配される。諸磯B式である。3. 磨消し懸垂文が描かれる。 $L < \frac{R}{R}$ 縄文である。4. 沈線により縦位に沈線が描かれる。5. 楕歯状の条線が器面全体に描かれる。



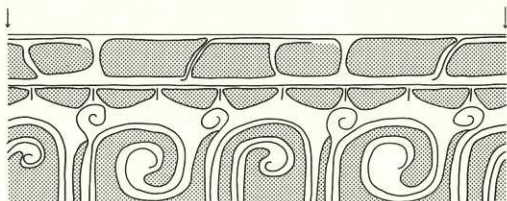
第54图 第4号住居跡出土土器(2)



第55图 第5号住居跡出土土器



第56図 第6号住居跡出土土器



第57図 第6号住居跡出土土器模式図

第6号住居跡出土土器 (第56・57図)

第6号住居跡出土の炉体土器である。口径約63cm、口縁部を約 $\frac{1}{2}$ と胴下半を欠損しているが、他の部分はよく残存している大形の深鉢形土器である。器形は胴部でゆるい曲線を描きながら口縁部にいたる。口縁部は内傾し若干細くなる。表裏とも火による加熱をうけたためか剥落がはげしく荒れている。文様は第57図の模式図に示すとおり口縁部、胴部の文様とも表裏同一の構成をとっている。口縁部は3つの楕円区画文が1組となり構成される。胴部は沈線を横に一巡させ直下に半楕

円形の文様が4対配される。蕨手状の懸垂文と渦巻文が左右対称で2対描かれる。縄文は $L < \frac{R}{2}$ である。色調は黄赤褐色で場所により暗褐色、胎土には小礫をはじめ細砂等が混じる。焼成は二次加熱をうけているため判然とはしにくい現状ではあまりよくない。口縁部文様帯と胴部文様帯は異系統文様の合体として理解でき、大変興味深い。

(b) 石器

第5号住居跡

石器は計106点出土している。内分けは石鏃4、剥片12、砕片88、石核2である。砕片の量が際立っている。石材には黒曜石、チャートが多用されており、わずかにシルト岩が混っている(第2表)。

1)石鏃 4点の石鏃は、いずれも破損している。

第58図1は脚部と考えられる。形から判断して、挟り大きい全長3cm程の石鏃と思われる。調整加工は入念である。折損面に剥離痕が認められるが、二次的なものと考えられる。チャート製。

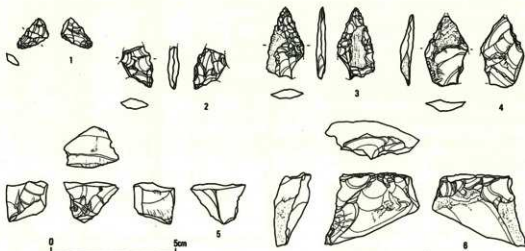
2は鏃身の中央から一方の脚部にかけての折損品である。正面図左上方に小さな挟りがあり、これがために全体形の復原が難しくなっているが、鋸歯状の側縁調整の一部と判断した。基部には浅い挟りが入っている。調整加工は全体に雑で、裏面中央には一次剥離痕を残す。チャート製。

3は基部の一端を欠く。調整加工は荒く、表裏とも一部に自然面や節理面・古い剥離面を残す。平基である。素材は剥片を折り取ったものようである。黒曜石製。

4も基部の一端を欠く。加工部位が極限されており、素材面を広く残す。未成品と思われる。素材は横長の剥片で、背面と打面に自然面を残す。黒曜石製。

	Obs	Ch	Si	計
石鏃	2	2		4
F	2	8	2	12
Ch	52	34	2	88
C	1	1		2
計	57	45	4	106

第2表 第5号住居跡石材別石器組成表



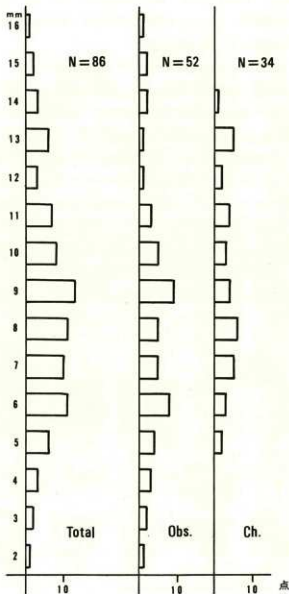
第58図 第5号住居跡出土石器

2) 剥片 剥片はわずか12点で、全体の10%を占るに過ぎない。長さ・幅を計測できる資料はさらに少なく、わずか8点である。8点の長幅比を計算すると丁度1.00となる。統計的に難のある資料数とは言え、ほぼ円形の剥片を得ようとしたらしいことが窺える。

石材別では、黒曜石2、チャート7、シルト岩3となる。総数では黒曜石が55、チャートが46、シルト岩が4であることを考えると、剥片における黒曜石の占る割合の低さが注目される。やはり黒曜石の入手の困難さに起因するものであろうか。

3) 碎片 碎片は全資料の84%を占める。伴出した二次加工のある石器が石鉄のみであることから推察できる通り、微細な碎片が多い。実際①背面に複数の剥離痕を残し、それらが打点近くでは同じ方向から、他端では逆方向から打たれている。②打面が線状か、石鉄の旧縁辺から成っている。という要件を満たすものを石鉄製作時の碎片として抽出すると、17点がこれに該当した。本住居跡から出土した石鉄がここで加工されたか否かは別にして、少なくとも住居内でそうした行為のあったことは間違いないように思われる。

碎片の石材別内分けは、黒曜石51、チャート36、シルト岩1となる。剥片の場合とは逆に、黒曜石の数が勝っている。これはサンプリング・エラーの問題とも関わるが、同じ大きさの碎片であれば光沢を放つ黒曜石の方が目に付き易く、回収を容易にしていることに一因するよう思われる。製品としての石鉄の数から判断しても、チャートと黒曜石の消費量に大きな隔たりがあったとは考え難い。前述の石鉄製作時の碎片に限ってみると、黒曜石15に対しチャートはわずか2点しか発見されていない。しかしこの数の差が、そのまま石鉄の数の差へスライドできるも



第59図 石材別碎片最大長出現度数分布グラフ

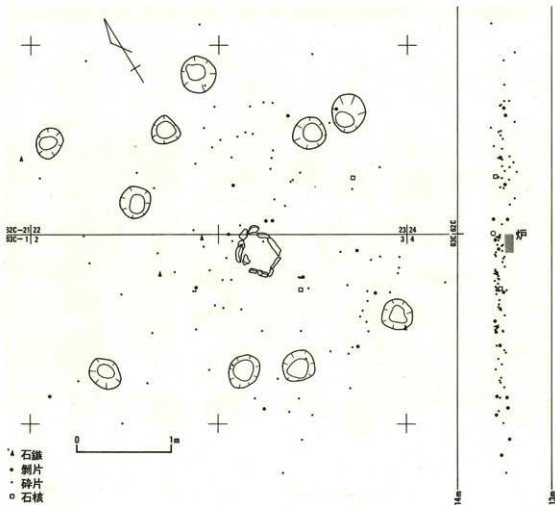
のとは考えられない。砕片が小さくなればなるほど、目立つ石材とそうでないもの間の回収率の差が拡大すると考えられる(第59図)。

4)石核 第58図5は消費され尽した残核で、満足な剝離痕さえ残していない。最大長は2 cm程でしかない。縞状に不純物が入った黒曜石。

6は剝片素材の石核のようである。背面中央にやや大きな剝離痕を残し、その後も頭部調整の様な小さな剝離を施しているが、剝片を取ってはいない。打面調整はない。チャート製。

石器の分布

住居跡内に分布する石器がはたしてこの住居に伴うものか否か、まずその検討から入る。不幸にして本住居跡では確実な床面の検出はできず、これを推定し得る手段として石囲炉が存在するのみである。そこで全石器の断面投影図を作成し、そこに石囲炉の断面図を合成して住居床面の凡そ

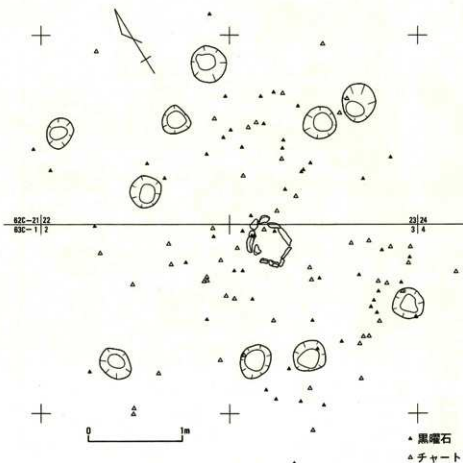


第60図 石器分布図

の位置を推定する。そして、その床面と石器群との垂直的な位置関係を検討するのである。こうしてでき上ったのが第60図である。これを見ると、炉の北側62-C区に入ると全体的に石器のレベルが下がり、炉の上面を水平に延長した線より下に位置するものが出てくる。一方南側63-C区では、延長線上から上位の幅10cm位にほとんど全ての石器がまとまって分布する。北側の地表からの木根等による攪乱がやや多いためかと推定できる。いずれにしても、垂直分布幅の狭さと床面推定線との接近度を勘案する時、石器群が所謂「床面直上」に位置するものとして本住居跡に伴なうものと考えて大過ないものと思われる。

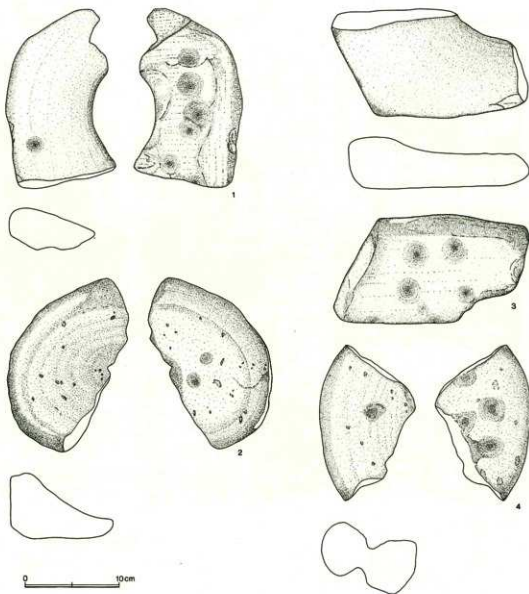
では次に、石器全体の平面分布を見てみよう。石器組成の大半を砕片が占めているために、ここでは石器の種類別分布の検討は行なわない。平面分布には幾分の疎密が認められる。すなわち、炉の北方1m位、西側、東南東1.5m位を中心にやや分布密度が高く、逆に炉の東から北東部、北西部では分布が希薄になる(第60図)。

また黒曜石とチャートの石材別に分布を見ると炉の北方、西側に接して、南方と東南方向1.5m

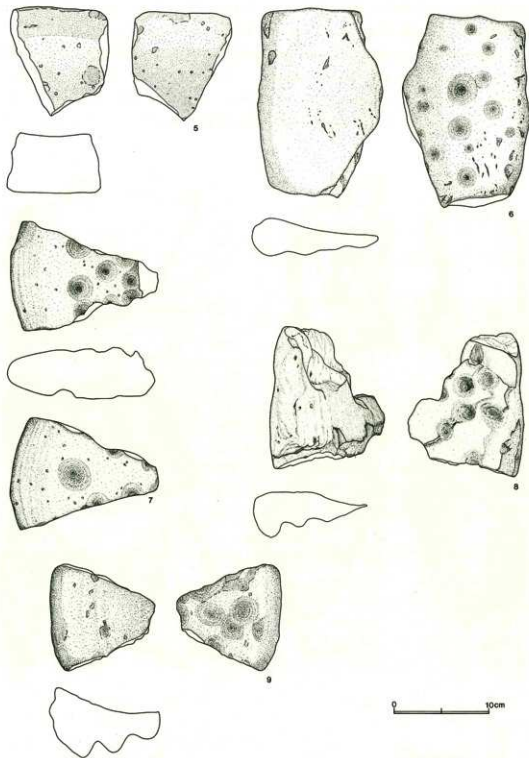


第61図 黒曜石とチャートの分布図

位には黒曜石が、炉の西側にやや隔れてチャートがそれぞれ多い(第61図)。わずか4点ではあるが石鏃を抜き出してこの図と重ねてみると、チャート製石鏃は2点とも炉の西方に分布しており、チャート製碎片の分布とよく符合する。これに対し黒曜石製石鏃2点は炉の東南東1.5m位と西北西2.5m位に分布しており、碎片の分布との相関はそれほど高くない。ただ「石鏃を製作する際に生じる碎片」の分布を見ると、黒曜石のものが炉の東南東1.5m周辺にやや集まる傾向にあり、集中的にはないにしても、少なくともこの周りで石鏃の加工作業の行なわれたことを窺わせる。



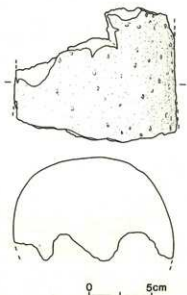
第62図 第5号住居跡炉跡1)



第63图 第5号住居跡Yuzhuo出土石皿(2)

第5号住居跡炉跡出土石皿 (第62・63図)

5号住居跡炉跡に転用された石皿が11点検出されたが、うち2点が接合したので9点となった(第62・63図-1~9)。石質は2・4・5・9が安山岩、1・3・6・8が緑色片岩、7が閃緑岩であった。石皿はいずれも欠損しており、約半の2を除けばほかは十以下である。重量は3が最も重く1,790g、軽いのは9の660gである。石皿は5を除いたほかは、凹石に使われている。内外面使用が1・4・7、外面だけは2・3・6・8・9で、内面だけ使用された例はない。これは石皿使用中に裏面を、凹石として利用していたためだと考えられる。



第64図 5号住居跡出土石棒

第6号住居跡出土石棒 (第64図)

6号住居跡の中央やや南寄り、覆土上層から検出された。覆土は多量の炭を含む土の中から発見され、火熱を受けて脆弱である。径は約13cmを測り安山岩製である。

3. 小竪穴

遺構

第1号小竪穴 (第65図)

台地中央部の26-B・Cに検出され、13号溝に中央を切られている。発掘時14号土坑と仮称された。形態は不整楕円形を呈し、長軸3.88m、短軸3.25mを測る。長軸はN-76°-Eである。深さは0.25mを測り断面皿状を呈して、壁は緩かに立ち上がる。床は不安定で、柱穴も炉もなく生活跡と考えるには疑問が残る。

覆土はしまりのよい土で、若干のローム粒。炭化物を含む黒褐色土が主体であった。

遺物は土器片が多く、遺構の周辺を除いた覆土中から出土した。

第2号小竪穴 (第65図)

遺跡最南端の台地西縁部、63-B・C区から検出された。当跡の5m東には5号住居跡が存在する。平面形態はほぼ隅丸方形であり、長軸3.07m、短軸2.78mを測る。長軸方向はN-38°-Wを指す。壁は南西から北西壁が浅く0.1m、北東壁が深く0.25mを測る。柱穴は4本確認できたがいずれも浅く0.1-0.3mであった。床面は平坦であったが炉は存在せず、生活跡としての機能をどれだけはたしたのであろうか。覆土は炭化物とローム粒を含む淡褐色から暗褐色を呈する。

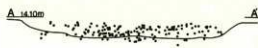
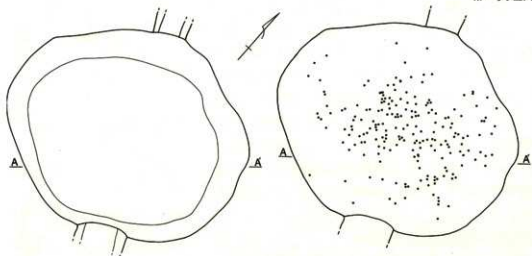
遺物は土器片が主体であったが少なく、覆土全体から散乱して出土した。

遺物

第1号小竪穴 (第66図1~4)

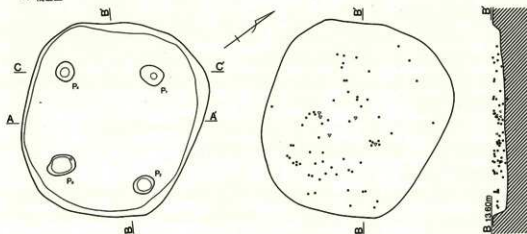
1、2、口縁下を無文にし沈線を描くものである。1は逆「U」字状の懸垂文を持ち、縄文はL $\frac{R}{R}$である。3はR $\frac{L}{L}$縄文を施こしたのち曲線的な沈線を描き、他の部分を磨消している。J字

第1号小壁穴



1. 黒褐色土 (13号溝埋土)
2. 若干のローム粒・炭化物を含む、しまりのよい黒褐色土
3. 若干のローム粒・炭化物を含む、しまりのよい暗褐色土
4. 褐色土

第2号小壁穴



1. 2-4mmの炭化物とロームブロックを多量、焼土を微量に含有する、しまりのよい暗褐色土
2. 炭化物とローム粒を少量含む、しまりのよい淡褐色土

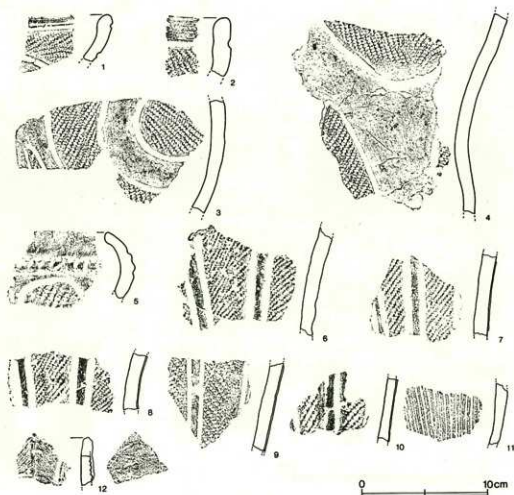


第65図 第1・2号小壁穴

状の文様を描いている。4. 「U」字状の文様と逆「U」字状の文様を交互に沈線により描き出すものである。沈線ははっきりと太く描かれており、縄文 $R < \frac{L}{L}$ が沈線内に施文されたのち磨消される。胴部はかなり膨らむキャリパー形を呈している。

第2号小壺穴 (第66図5-12)

5. 口縁部を無文化し、二条の沈線を横走させる。沈線間には刻みが入る。胴部には $R < \frac{L}{L}$ の縄文を施文したのち、逆「U」字状の沈線で区画し、沈線外の縄文を磨消している。6-10はカマボコ状の断面を有する隆帯により懸垂文を施す胴部の破片である。縄文を施したのち、隆帯にそった沈線を垂下させている。6-8・10は $R < \frac{L}{L}$ 、9は $L < \frac{R}{R}$ 縄文を施文している。一般的にこれらの土器の焼成は極めて良好であり、表面がつやを持っておりよく磨かれている。11は櫛歯状の施文具により縦位に条線を密に描くものである。曾利式土器の破片又は連弧文土器の破片であろう。12は縄文早期野鳥式期の破片である。細隆起線文を垂下させ斜行する細沈線で充鎮させる。



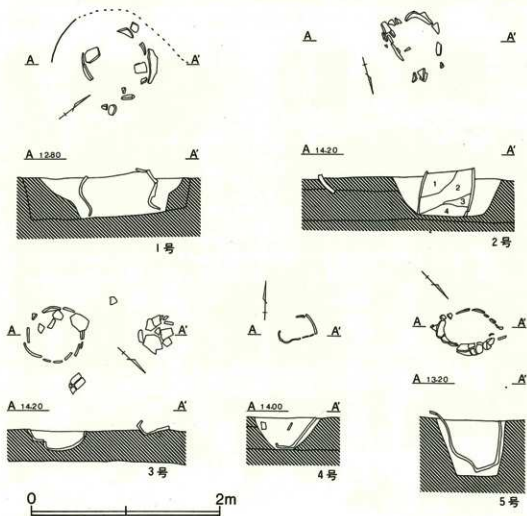
第66図 第1・2号小壺穴出土土器

4. 埋甕

遺構 (第67図)

1号埋甕 10-B-12区に検出されたが、台地東縁部にあたる。土器の広がりには長径1.0m、短径0.8mを測る。深さは0.48mである。掘り方は径1.3~1.4mを測るが不明確である。土器は倒置して埋納してあるため、胴以下が削平されている。土層は粘性に富む褐色である。

2号埋甕 26-D-16区に検出されたが、土器の広がりには長径0.74m、短径0.55m、深さは0.52mを測る。土器の中の土層は1-暗褐色土、2-黒褐色土、3-褐色土、4-明褐色土。土器の口縁は削平のため欠失しているが、底部付近は最初から欠いてあった。



第67図 埋甕

3号埋壺 29-D-21区に検出されたが、正置して埋納されていた。土器は0.57×0.73mに見られ、深さは0.2mを測り胴下半は欠いてあった。0.6m離れて胴部下半の土器が斜位に置かれていたが、埋壺との関連が予測できる。

4号埋壺 2号住居跡内に検出されたというが、位置が不明確である。あるいは住居跡に伴う埋納土器の可能性もある。土器の広がりには0.25×0.41m、深さ0.33m測るが、土器は正置されており、上半部を削平により欠失している。掘り方は土器の大きさとあまり違わないようである。

5号埋壺 16-B-3区に検出されたが、20号溝の底に検出されたため、土器の上部が欠損していた。土器の広がりには0.49×0.8m、深さは0.65mを測る。土器は僅かに傾斜して置かれていた。掘り方は土器より僅かに大きい程度であった。

遺物

第1号埋壺 (第68図1)

口径37cm、器高42.5cmの両耳壺である。底部よりゆるやかな曲線を描きながら耳の部分で内傾し口縁部は全体的にラップ状に外反する。耳の部分は共に欠損している。小わくを中心とし、左右に楕円形のわくを隆帯でつくり出している。わく内には $L < \frac{R}{R}$ 縄文が施文されている。胴部には櫛歯状施文具による条線が全面に施文されている。色調は口縁部では暗褐色であるが胴部から底部にかけては黄褐色～赤褐色を呈する。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。

第2号埋壺 (第68図2)

口縁部と底部を欠損している。胴部はゆっくりと膨らみながら外反してゆく、文様は二本の隆帯の貼付により構成される。隆帯間には沈線が施こされる。第69図の模式図に示したとおり規則的でないが4つの縦に区画する意識は明確になっている。第68図2に示した太面を表面とすれば裏面では渦巻の巻き方が逆になり、蛇行する隆帯推方向が逆になる。右側は何ら隆帯による施文はなく、縄文が施文されるのみである。左側では右側の反動化のごとき文様を呈しており、渦巻き以外にも蛇行する隆帯や垂下する隆帯を渦巻きの左右に配している。隆帯間には $R < \frac{L}{L}$ 縄文を密に施文している。色調は黒褐色～暗褐色を呈している。胎土は密で焼成は極めて良好である。

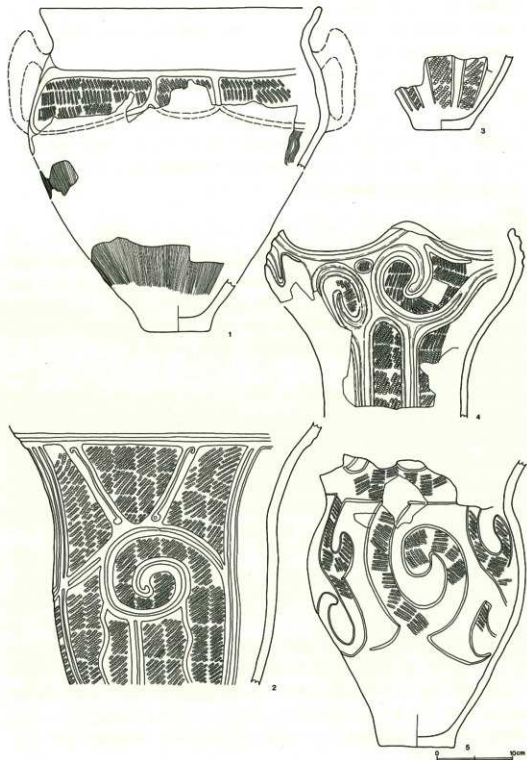
第3号埋壺 (第68図3、4)

3. 深鉢形土器の底部である。沈線による懸垂文を描くもので沈線間には $R < \frac{L}{L}$ 縄文を施文し、1つおきに磨消し部を作り出すものである。色調は黄褐色～赤褐色であり、胎土は小礫を含む。焼成は良好。

4. 口径30.6cm、4単位の小舌状突起を持つ、胴部はゆるやかに外反し、口縁部は大きく外反するが、口唇部は内傾する。突起下にJ字状の文様を沈線で描き $L < \frac{R}{R}$ 縄文を充填する。J字間には小さな楕円文と半円状の文様が順次施文されている。胴部文様帯は8つの逆「U」字状の懸垂文が配られるがJ字文下より垂下する沈線を境に左右対称になっておりやはり4単位であろう。 $R < \frac{L}{L}$ 縄文が施こされている。色調は暗褐色、胎土は細砂を含む緻密である。焼成は極めて良好である。

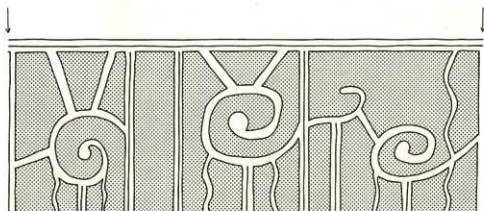
第4号埋壺 (第70図)

底部よりゆるやかな曲線をえがきながら胴部にいたる底部である。沈線による懸垂文が施こされており、沈線間には斜行縄文を充填させる。色調は暗褐色であり、ところにより黒褐色を呈してい

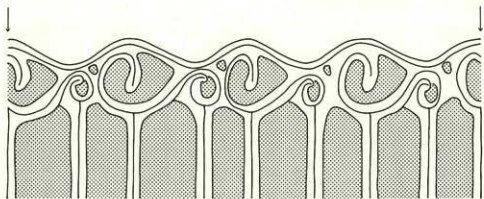


第68图 埋藏出土土器

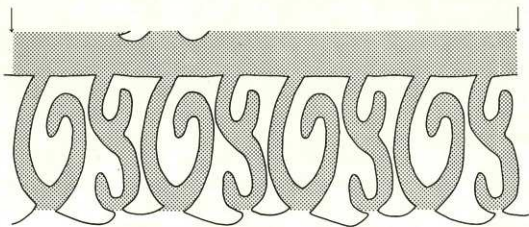
1. 1号 2. 2号 3. 4. 4号 5. 5号



1



2



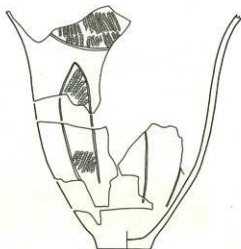
3

第69图 理髮出土土器模式图
1. 2号 2. 4号 3. 5号

る。胎土は小礫細砂を含み、焼成はよくない。

第5号埋壺 (第68図5)

口縁部を欠損しているが他の部分はほぼ完形である。底部より胴部にゆるやかな曲線を描き、胴部半ばでくびれて外反してゆく。くびれ部を境に文様を変化させている。上半の文様はほとんど不明であるが沈線の描かれているのがわかる。「J」字状の文様を1段目と2段目では逆さに2段に重ねる。1段の大きめの「J」字文を交互に2対1組の4単位で構成されている。上半と下半の文様では縄文の充填の方法が全く逆になる。色調は上半は黒褐色であり、下半部は黄褐色を呈している。胎土には細砂を含み、焼成は極めて良好である。



第70図 第4号埋壺

5. 土坑

土坑は発掘時36検出されたが調査途中、調査終了後に14号土坑が1号小竪穴に、29号土坑が5号埋壺に変更になった。遺物の註記など終了しているため、ここに対照表を載せる。なお11号土坑以前の変更はない。

調査時	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
報告時	欠番	12	1号小竪穴	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	5号埋壺	27	28	29	30	31	32	33

土坑の分布状況は、台地中央から東縁部に多く、特に集中する地点は19-C区付近と12・13-C区付近である。前者は住居跡が近くにあるが、後者は土坑のみの分布である。

遺構 (第71図～74図)

1号土坑 (第71図)

遺跡最北部の台地東縁の9-B区に検出され、長径1.02m、短径1.0mの円形を呈する。深さは0.58mを測り、底部は平担で壁は急傾斜で立ち上がる。覆土は1-ローム粒、炭化物を含む暗褐色土、2-1層にロームブロックを加えた黒褐色土、3-炭化物と多量のローム粒を含む暗褐色土、4-ロームブロックを多量に含む褐色土。

2号土坑 (第71図)

12-C区に検出されたが、形態は不整円形を呈し、長径1.16m、短径1.02mを測る。深さは0.34mを測り、断面形は浅い楕円形である。覆土は1-炭化物・赤色スコリア・テフラ状の白色粒を含み、固くしまった暗褐色土、2-1に比べ明るく、しまりの悪い暗褐色土、3-ロームブロックを若干含む暗褐色土、4-ローム粒・赤色スコリアを含む褐色土、5-明褐色土。

3号土坑 (第71図)

2号の南東の12-C区に検出された。やや楕円形を呈し、長径1.02m、短径0.81mを測る。深さは0.27mで、断面形楕円状を呈する。長軸はN-25-Eを指す。覆土は1-スコリア・炭化物を含